383.4
N42 1n

0053921000

0053921-000

３８３．４－Ｎ４２１ｎ

日本の扇

中村清兄・著

河原書店

１９４２

AIB

エ73E73

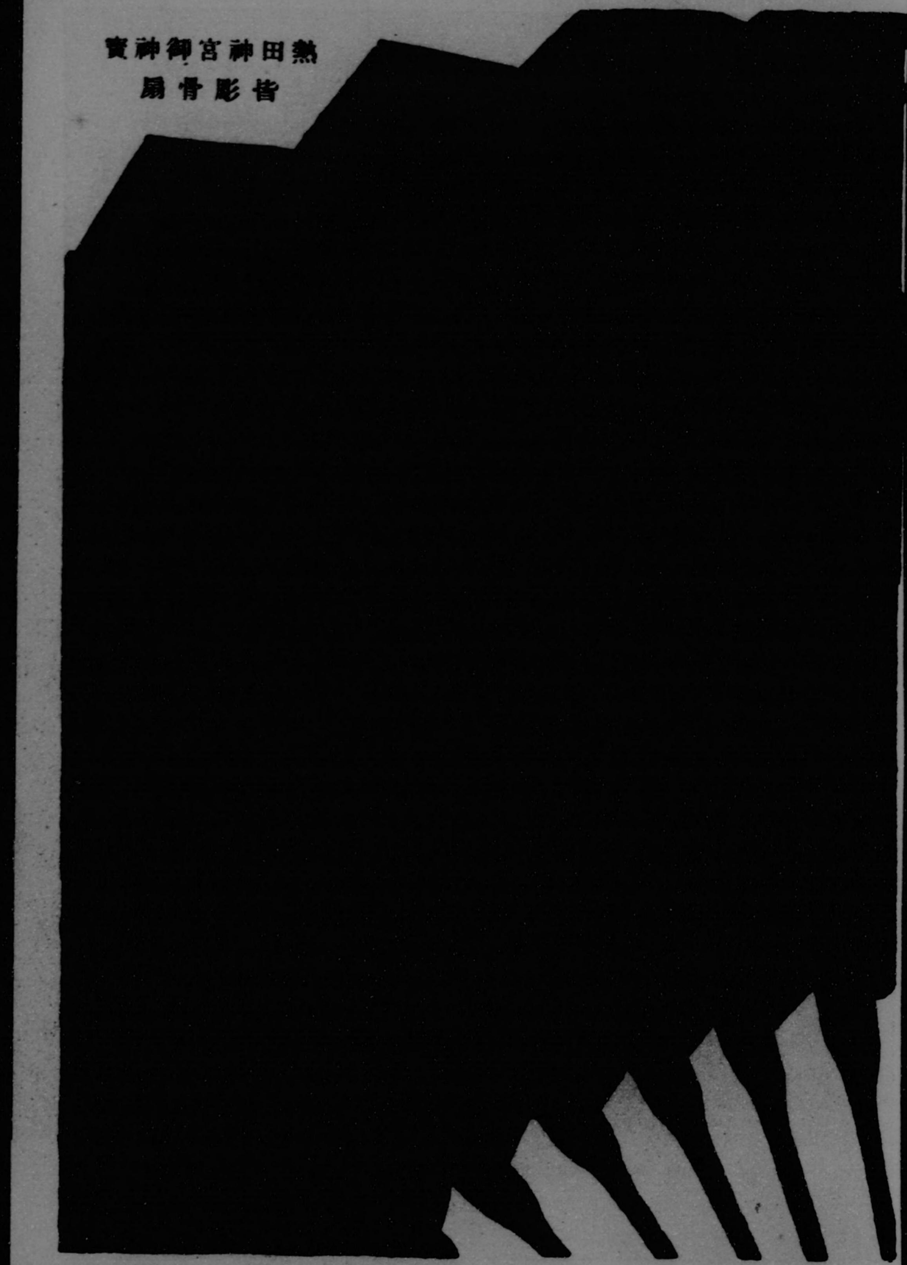
日本の美と教養

日本の扇

中村清兄著

河原書店版

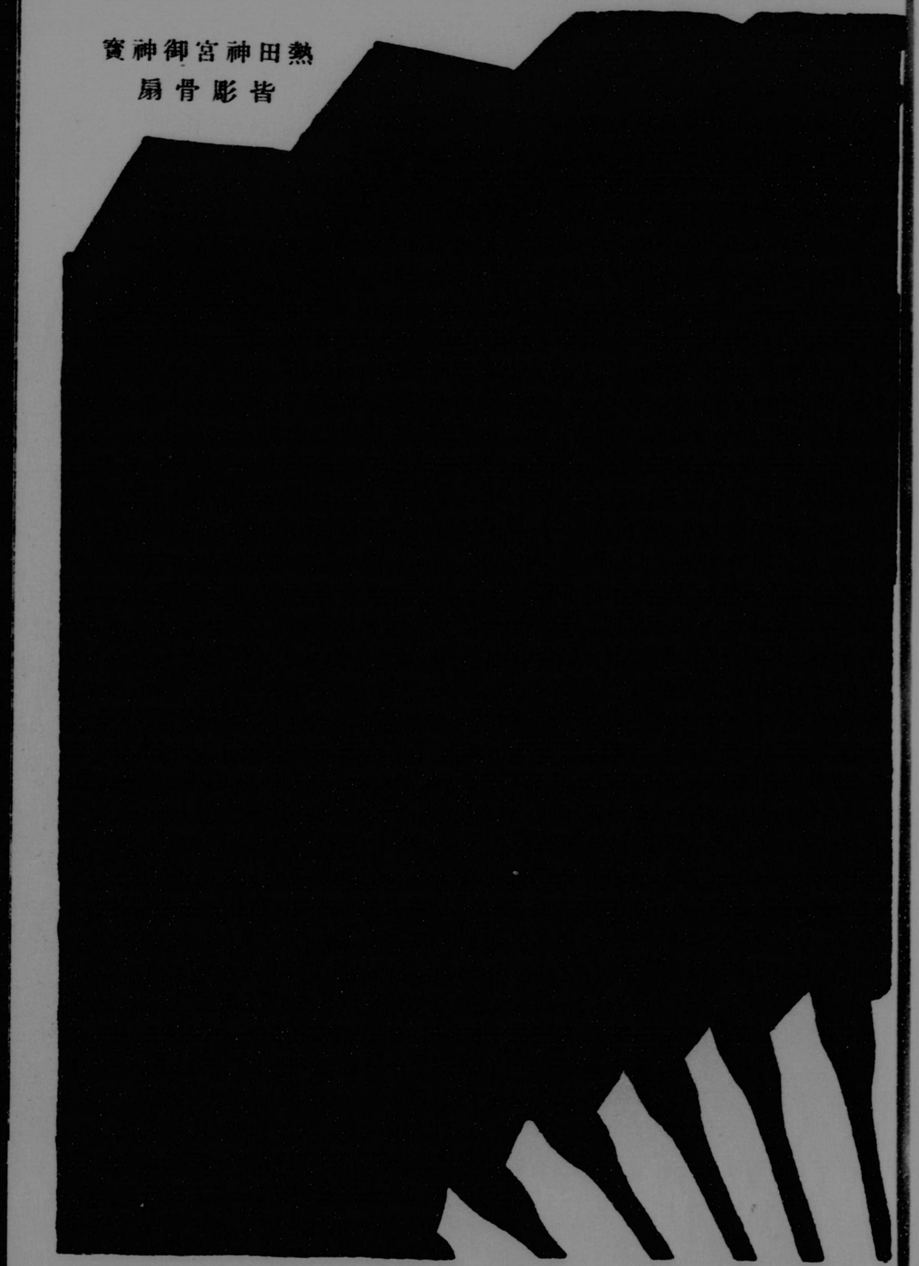
熱田神宮御神寶
皆影骨扇



この技の祖と我家の祖達の御魂の前に謹んでこの小著を捧ぐ

国立国会
29.1.18
図書館

315480



熱田神宮御神寶
皆彫骨扇

この技の祖と我家の祖達の御魂の前に謹んでこの小著を捧ぐ

国立国会
29.1.18
図書館

315480

敎王護國寺藏（源氏寫眞）　傳延喜辛櫃風俗畫（二部）

383.4 N42 1 n

題言

吾らは、國防の高調に應じて、國本の培養も亦深厚なるべきを惟ふ。國本の培養は國民の教養に起る。國民の教養は先づ國土國風の尊重に始まらねばならぬ。吾らは、恒に國土を愛して益々深く國恩を感じ、國風を敬ひて愈々高く國光を仰ぐ。而して感恩景仰の念は主として知見に基く。

是に由て、吾らは、日本的なる美の傳統と日本的なる美の精粋とを、個々の姿に於て、具象的なる形に於て、自得し自覺し、固く之を把握し、寛かに之を抱擁し、昂然之を顯彰することに邁進しなければならない。日本の風土の美、日本の民俗の美、往々にして、閑却せらるゝもの、輕侮せらるゝもの、埋沒せるもの、

潜在せるもの、或は辛うじて遺存せるもの、或は漸く衰頽に瀕せるもの、敢てそれを高遠に求めずとも、卑近至るところその例が甚だ多い。卽ち吾ら同人相議りて之を分擔し、各々その徴に入り、その細を穿ちて、精到なる研鑽を盡して行かうと思ふ。而も之を說いて理窟に陷らず、之を唱へて迫狹に馳せざるやうにと深慮してゐる。

姑く例を日常茶飯の物にとり、行住坐臥の間に考へてみよう。吾らは、日本の國土に生ひたつ一木一草に見入るにつけても、一鳥一虫に耳目を樂しませるにつけても、この國土に住めるしるしありと思はぬことはない。吾らは、日本の家屋にすまひして、疊の上に起臥しつゝ、冬は障子に屏風に炭火に、夏は扇子に團扇に浴衣に、しみじみと國俗に循ふ生活を謳歌せざることがない。床の間に掛物を見、壁の上に額を仰ぎ、若しは風呂にひたり、若しは下駄で歩き、或は酒を酌み或は味噌汁をすゝり、刺身にしろ、梅干にしろ、ムスビでも、柿の種でも、顧みれば一として懐かしからぬものはない。心あらば何人か敢てそれを廢棄しようぞ。よしんば盡くが絶對に國土發生のものとは云はれぬにしても、苟くもこの美なる國土に化育せられ、美なる國風に包容せられて、渾然と攝取せられ盡くして以て國本の培養に資し來りたるものならば、いかなる外來要素たりといへども、毫も之を見逃がすべきではあるまい。

茲に吾ら志を同じうする者、かくの如き見地より相戮力し、日本的なる美を明徴發揮することに勉め、之に由て日本人の教養を富贍ならしめたいと冀ふ。蓋し現代の需要に適應するものが切實であらうと信ずる。

紀元二千六百一年六月

新村出

はしがき

天皇様がまだ京都の御所で天の下を治しめし給うた頃、京都の御所の周圍幾町かに亘たつて禁裏御用の家々があつた。

皇室の御調度などを奉仕する事は無上の光榮であり、唯一の誇である。さういふ家々は、その爲にのみ生き闘がれていつた。そこに一子相傳の秘法として尊い　皇家のくさ〴〵の事がつたへられた。

しかし、今はさういふ家も業も、殆んど全てが斷絶し、流亡した。

禁裏御用の三百年に近い扇折の我家職の中には、やはり口傳がのこされてゐる。多くは技に關する傳へではあるが、中にはとほく平安朝の古へまで、職匠の流れのまに〳〵つたへられた故事すらもたもたれてゐる。今、日本は未曾有の大更新にめぐり遭ひ、日本の世界の建設が巨大に歩み出してゐる。

従つて、さま〴〵の舊い傳へ、古い業は新らしい息吹の下に蘇生せねばならぬ。その爲には、口傳祕傳も廣き人々の所有とならねばならぬ。

私はこの爲に、家職としてこの技一つに生きた扇の歷史をものせざるを得ない。そしてあらためて、日本が世界唯一の扇の發見者であり、それを世の流れの種々に發展させた事を高唱したい。外つ國の人々は、我日本の扇を傳へ倣つたものに外ならないのだ。

私はこのさゝやかな手馴草を見るにつけ、無上の誇りと無上の感激、その古い歷史とその優しい日本の美を感じないわけにはゆかない。

昭和十七夏五

松月堂の工房にて

中村清兄

正誤表

頁	行	誤	正
題言	二頁 十二行	或に	或は
本文	二八頁 四行	つゞへる	つどへる
〃	四三頁 十一行	寺櫃の	寺傳の
〃	四四頁 一行	檜材	檜材
〃	六一頁 九行	宋史	「宋史」
〃	六八頁 五行	ひゞきをさえ	ひゞきをさへ
〃	一一八頁 十一行	それ〳〵	それ〳〵
〃	一四〇頁 九行	さが野ノ小松	さが野の小松
〃	一四五頁 一行	一はき	一きは
〃	一七五頁 九行	いつえがさね	いつへがさね
〃	一八一頁 表題	みなえりぼね	みなゑりぼね（以下すべて同じ）
〃	一八二頁 五行	みなくれない	みなくれなゐ（以下すべて同じ）
〃	二一六頁 十一行	「東方見聞錄」、には	「東方見聞錄」には、
〃	二二〇頁 六行	珍重されてやがて、	珍重されて、やがて
〃	二四二頁 九行	應永八毎年度	應永八年毎度
〃	二四九頁 十二行	百にわたる	百年にわたる
〃	二八〇頁 七行	所謂中平骨	所謂中平骨
〃	二九三頁 五行	今まで生ける身を	今までは生ける身を
〃	二九八頁 四行	梶の賞	椎の賞
索引三五三頁	下段六行	討朝鮮貿易	對朝鮮貿易
〃	三六一頁 下段九行	裏扇	寒扇

從つて、さま〴〵の舊い傳へ、古い業は新らしい息吹の下に蘇生せねばならぬ。
その爲には、口傳祕傳も廣き人々の所有とならねばならぬ。

を得な
の流れ
へ倣つ
その古

目次

題言
はしがき
起の卷 其一
始めての扇……一
一、人は……二
二、扇日本に生る……四
三、深き御心ばえ……五
四、五明が事……七
五、傳へ說かるゝもの……一〇
六、神話を溫む……一三

山に住む人……一五
一、萬葉一首……一六
二、扇の字……一八
三、田人と蝗と烏扇の話……二三
四―五、皇朝と唐と……二四
扇合せ……二七
一、鴻臚館……二八
二、遊樂……三〇
三、「圖融院扇合せ」一卷……三一
四、羅を張る扇……三七
五、文獻の世界……四〇
六、延喜の前後……四六
七、檜扇は……四八

八、かはほりは……五三
九、日々のいとなみ……五七
夏扇と冬扇と……五九
一、漢字由來記……六〇
二、妻子珍寶及王位……六六
三、うつり香……七一
四、女房……七六
五、みへがさねの檜扇を偲ぶ……八五
六、夏扇のこゝろ……九八
七、くろがいの骨、きなる紙……一〇三
秘庫開鑰……一一一
一、扇面寫經が事……一一三
二、彌勒の世まで……一一三

三、横目が事……一三三
四、いつくしま……一三六
五、地藏菩薩扇を孕み給ふ事……一五三

承の巻　其二

ものゝふの心……一五九
一、武士興起の事……一六〇
二、永仁御即位次第の事……一六三
三、蜷が事……一七三
四、檜扇わすれの事……一七七
五、義經裝束の事……一七九
みなえりぼね……一八一
一、みなくれないに日出したる扇……一八三

二、しやく木のみなえりぼね……一八五
三、妻呉藍……一九二
婆娑羅……一九七
一、ばさら……一九八
二、落花深處……二〇二

轉の巻　其三

仁風……二〇五
一、明成祖……二〇六
二、メヂチ家の女……二一五
三、清教徒……二二七
余芳……二三一
一、家々の紋……二三二

二、熊　野……二三七
三、枯淡と華麗と……二四八
四、上下無差別……二五三
新　生……二五七
一、唐物傳來……二五八
二、不開不實……二六三
三、一日晴……二六四
結の巻　其四
有職故實……二六七
藝と扇と……二九五
一、鞠と扇と……二九六
二、香と扇と……二九九

三、茶と扇と……三〇三
四、能と扇と……三〇九
五、踊と扇と……三一〇
もりあがる力……三一五
扇系圖と扇年代記……三一七
索　引……三四一
結　語

起の巻

其一

始めての扇

一

夏は扇　冬は火桶に身をなして
つれなき人によりもつかばや

と「拾遺集」にうたつてゐる。

流らふ雪の冬の朝に火桶にさしのべられる手は、蟬の聲滲む夏の日に扇を搖り動かす手である。人間といふものはこんなものである。隨分と我儘であり氣儘である。

しかし、實はこの氣儘も我儘も、大切な人生の要素である。精神文化に於ても物質文明にあつても、結局はこの氣儘我儘の生み出した產物である。だから人間は氣儘でなければならない。我儘でなければならない。が、それはたゞ單に氣儘であり我儘である事が必要なのではない。

現在の立場に反抗する處に氣儘があり我儘がある。そこに希望があり、慾望がある。そしてそれを一つ〳〵實現しようとし、又せられて行くのが人生である。この希望、この慾望が必要なのである。

その點で日本といふ土地は成程よい土地だと思ふ。狹い土地だからこそ海を渡つて廣い天地を求めようとし、寒い冬と暑い夏、そして花さき葉落ちる春秋を知つてゐるが故に、いつもこの春秋の好季を己が常住の世界にしようとする。炭火と扇とが手早く、手易くこの希望を滿してくれた。中でも炭火を知つたことは隨分と古くから、しかもひとり日本だけにと限つた譯ではなく世界の到る處で人間の世の中に入りこんできたのであつた。恐らく何萬年かの歷史を有つてゐる事であらう。それに較べると扇はやつと千年足らずの歷史しか有たない。しかしそれは實に日本人の發明だといふばかりでなく、それが廣い地球を隈々まで行き渡つたといふ點で、われ〳〵は快哉を叫ばないわけには行かな

い。

春秋の二季のみしか知らない人生にも、冬だけの、又夏だけの世界にも扇の起りさうな事はない。極地の人達にとつて冷風を求める必要のない事はいふまでもないが、熱地の生活者にも冷風は未到の世界なのだ。南洋の原住民の生活には扇形をした物品は造られてはゐても、それが火を起す爲にしか使はれてゐないといふ事實がある。そこには扇——卽ちあふいで冷風を生ずるのが目的の扇は起つてはこなかつた。その點で日本の土地は扇にとつて最もよい土地だつたと思ふ。

二

人々は云ふかもしれない、「扇が何も唯日本に於てのみ創らねばならないといふ理由はない。日本の文明の大概は支那土產なのだから、恐らく支那に、あ

の春秋冬夏の嚴しい支那に生れたのだらう」と。

しかし人は單なる空想で、「たらう」話で、ものを極めてはならない。今のところ事實が日本の創始をかたつてゐるのだから。まして、宋代には彼地の人々も倭扇といふ文字をこの日本の摺疊扇、つまり折りたゝめる扇に使つてゐるし、日本の產であることを取別け强く云ひたてて彼地に無い事を歎いてゐる。

尤も、古く——といつても五山文學の榮えた鎌倉から室町の時代へかけて、人々は何でも彼でも、支那に起原を求めようとした。扇についてもさうである。或は五明と言ひ、或は便面と稱して、かの地に使はれた團扇に對する名稱が、この國風の扇に與へられたのであつた。

三

この時代よりも一時代先の平安藤原の頃にはかういふ言ひ方はしなかつた。

詩文の場合の様な唐風の思想文物を寫す場合には團扇を、國風の情操をものする場合には扇をと實にあざやかに區別してゐた。元慶の頃、都良香（ミヤコノヨシカ）が深い惜別の情を込めて渤海の使者に書き送つた二十本のそれは勿論團扇であるし、光源氏が女のもとで忘れて行つたのはいふ迄もなくあふぎである。しかし、この時代はこの様に區別はせられてゐたけれど、それはただ區別をしただけの事であつた。この時代のつねとして、物ごとの起原を問ふといふやうな事はない。事ろ慣習の上から「だれそれがどういふ時にさうしたから」とか、「深き御心ばえから」とかいふ事が、重んぜられてゐた。いつもこれが問題になつて月卿雲客の間に嵐が起つたのだつた。起原を云々する必要のなかつたのは、扇の起りがそんなに遠い昔でもなく、人々に明らかな事であつた爲であつたであらうか。又、この時代の早い頃にものされた源順（ミナモトノシタガフ）の百科辭書的な「和名類聚抄」にも、たゞ

扇　四聲字苑云扇式戰反和名阿布岐風也、玉篇作煽在竹、蒙名苑云扇一名箑音捷字亦作箋

團扇　唐令曰團扇方扇團扇字知波

蒲葵扇　晉書云蒲葵扇、今按蒲葵者或木別名也、今俗扇者以蒲作之

とかゝれてゐるに過ぎない。これが唯一の典據であり、これに出次をもとめるより他に方法がなかつた爲でもあらうか。

四

それに反して幕府政治に入つてからは、はげしく起原が論ぜられる。故實が尊ばれると共に註釋が盛んに行はれる。註釋の爲には一應の體系が必要であり、それには首尾一貫が大切である。そこに起原が云々される根據がある。註釋といふからには學問的でないわけには行かない。當時の學問が支那書に對する知識であつたから從つて支那的なものが學問的となり、支那に根據を求めることが學問らしく見えた。扇を支那起原とするのもこの時代に初まつた事だつ

た。

さきにのべた五山文學に見られる文字も支那的であり、漢・六朝の文獻にあらはれる用語である。そこに當時の學問が見られる。唯だ、われ〳〵にわからないのは五明といふ文字を採つて來たといふ事だ。勿論、六朝の崔豹が著した「古今注」――これは源順の「和名類聚抄」にもよく引用せられる書であるが――に明らかに

五明扇　舜所レ作也、既受二堯禪一、廣開二視聽一、求二賢人一以自輔、故作二五明扇一焉、秦漢公卿士大夫皆得レ用レ之、魏晉非二乘輿一不レ得レ用。

といつて、五明は扇といふよりも翳の異稱と考へられてゐる。併し乍ら、舜が四方に聖人を求めた事からどうして扇が發明せられなければならないのだらうか。「古今注」に現はれた言葉は當時の通行語であり、しかも註釋を要する程の當時不明の言葉であつたのだらう。舜に關しては「史記」の方がより着實であり、より古代的である。「史記」には「於是舜乃至於文祖、謀于四嶽、辟四門、明通四方耳目、命十二牧、論帝德、行厚德、遠佞人、則蠻夷率服」とかゝれて、「古今注」の說明と符合する文面がある。しかし悲むべき事には、之が扇の起原であるとはのべてゐない。

五明がなぜ扇なのだらうか。強ひていへば、門扉を五明と言へないであらうか。扇が門扉を指す事は唐土の辭書にみられる處である。從つて、門扉より轉じた扇即ち翳は五明といへやう。でも、どうしても折りたゝめるあふぎが五明といふ異名を負はされた事は不思議でならない。近頃は五本骨の扇が五明といふ名でよばれてゐるのなどはなほ更さうである。

かういつた京・鎌倉の五山を中心とした漢學的なものゝ考へ方の盛んであつた時流に抗して、たゞ一つ漢土起原を否定して「當時扇ハ日本ニテ造始也」と扇の國朝起原を叫んでゐる書物がある。「遖囊抄」である。しかしながらこの書の

成つた室町時代は、物の更替の激しい時代で世間の人々には、その様な固苦るしい論議は不要である。新らしい異國の文物の方が、より一層興味をひいた品物であつた。從つてこの所論も學者仲間である僧侶達の間に受入れられねば何の甲斐もない。いきほひうもれ去られてしまはねばならない運命を持つてゐた。

五

兎に角、漢學の傳統が、この五山に守られた鎌倉・室町の時代は常に國土尊重の風を壓へて、かうした支那的な解釋が行はれたのだつた。

幕府が江戸に移つてからも、漢學者流には漢土崇拜の風潮が續いて一層漢土化が高唱せられた。しかし、この時代は又一方國學が漸次に勃興して最早や漢學に向つて對等の地位を得るまでに至つた。

かうした時代になると、物の起原についても今度は何から何まで御國振(ミクニブ)りが

唱へられたのだつた。扇の起原についても同様である。こゝでは日漢混淆の說が現はれて來た。さきに擧げた五明が起原に考へられた事はいふ迄もないが、新らしい說が一つ取り入れられて、皇國では「かうである」と對照せられてゐる。西村義忠の書いた「扇の記」には次の様に述べられてゐる。

神功皇后三韓をしたがへ給ひしころ武內宿禰の筑紫の國博多の湊にて扇を作り奉給ふといふことも聞きつたへ侍り候へども本說たしかならされば證據ともしがたし

とか、或は

むかし天智天皇の御代に丹波の國佐伯の郡に宿禰の豐丸といふ陰士有り、常に山澤に行て笙をふきて遊べり。鳥類畜類此音によりてきこうもりのかたちを見て末廣の扇を作りて奉りてきけりとなん。あるとき千とせをへし白帝御かんのあまり豐丸を高官に成し給へども官は辭して仙鄕に入しとなん。豐丸か子に佐伯の郡を給はり父かたくみを其まゝに佐伯の中將末ひろと名つけましますとなん。物にはあやかると申て目出たきことを思ふなり。

この「扇の記」よりも尚一層古い「中島宗次記」には五明を解して

あふぎを五明と云事。あつき時つかふ、第二に祝言に指事也、第三に御座敷にて物をすべて參らする也、第四に刀なくして敵をしりぞくる也、第五に天照大神なり、其故に扇を賞翫する物なり、此外五明と云ふこと口傳あり、

としてゐる。之などは一層牽強附會のはなはだしいものであらう。しかし、かうしてまでも五明の名を日本的に解釋しようとした事は、とも角も、その勞を多としなければならない。

これらの所説の中で、とり別け「扇の記」の説は随分と廣く行きわたつたものらしい。泰西の人々の間にも日本扇の起原としてのべられてゐる程である。だがしかし、古い文獻例へば紀記の様なものにも決して載せられてはゐない物語であつて見れば、どのやうにして、このふるい物語がずつと時の隔つたこの書の時代、つまり寛政の頃まで傳へられ來つたのであらうか。

六

勿論、扇といふやうな機械的な構造をもつてゐる品物が様々な人達によつて、何の關係もない様々な土地で、偶然に發明せられさうにも思へない。何人かゞ、何時の時にか思ひついたものに違ひはないであらう。それが或は武内宿禰に、或は豐丸に托されて語られた處に神話的ななつかしさを人達の心の中に呼び起すものがある。批判はどのやうにでも加へられる。しかしさうすることはかへつて吾々の心を棘々(トゲトゲ)しいものにするばかりである。

あたゝかく抱いて、この神話をいつまでも語り傳へたいものだ。

山に住む人

一

「萬葉集」卷第九に

とこしへに夏冬ゆけや裘
扇はなたず山に住む人

といふ一首がある。これは忍壁皇子に奉つた歌である事がその端書(ハシガキ)で知られるが、おしい事に作者は不明である。この歌ばかりが「萬葉集」通卷二十、四千數百首もの數多い歌の中で扇を詠んだ唯一つの歌である。よまれた時代も、忍壁皇子の御在世(一七五〇)の間であるから可成あきらかなものであり、扇の最も古い文獻の一つといふ事が出來る。

忍壁皇子は人も知るやうに、天武天皇を御父とせられた博學多才な皇子であらせられた。壬申の亂に天皇に從つて東國に赴かれたけれども、その九年には

詔を奉じて史上に有名な帝紀及び上古の事を撰せられ、次で文武天皇の四年には又々藤原不比等とともに勅を奉じて律令(リツレウ)の撰定にあたり給うたのである。即ち、帝紀等の撰定は親王が我古事に曉通し給ふ事を示すし、律令の撰定は親王の漢籍唐典に明晰であらせたまうた事を語るものである。帝紀等の撰定といつても、それは語部(カタリベ)の傳へる御代々々の事や、上古の傳を文字を以て書き記す事であり、それには充分な漢典の素養が必要である。親王にはそれがあらせ給うた。上述の典籍の編纂も勿論多くの漢士からの歸化人をして之にあたらせられた事であらうが、それを統率し給ふに充分な御學殖を御持になつてゐられたのであつた。親王は當代の人々から見れば、當時に於ては文化の遙かに高い支那の學者のそれのやうに崇められ給うたに違ひない。さればこそ、この萬葉の歌がつたへられてゐるのである。

二

「山に住む人」としいへば仙人である。當時は、仙人には山にすむ人といふ和名が與へられてゐた。そして仙人こそは、支那に於ても漢からの風潮として人々の恒にそれに成化せんと願つた超人であり、隋・唐の世に於てもその風は熾烈であつた。親王を仙人になぞらへた事は、勿論親王をこの上もなく碩學として崇め奉つた事であつた。「唐人の碩學のやうな」といふのが最大の崇敬の言葉である。仙人であれば冬には裘、夏には扇をたづさへて、しかも不死の生活を送る事であらう。裘（カハコロモ）といふは支那式である。扇も亦支那式でなければならない。果して摺疊しうる扇であらうか。

勿論、萬葉の本文にも扇と一字で記されてゐる。從つて、アフギと讀まれたのか、ウチハと讀まれたのかはこの本文だけでは明らかではない。アフギにしてもウチハにしても共に和訓であり、從つて、後世でこそ扇はアフギ、團（又は團扇）はウチハであるが、古くはウチハよりなかつた支那に於ても扇一字を用ひてもゐる。ウチハといふ言葉は一見なんとなく新しい感じを與へる。けれどもウチハのウチといふ語が蠅などを打ちたゝくといふ事ではなしに、ウチタケなどと加茂眞淵が「古事記頭書」にいふ樣に美稱の接頭語と見れば、萬葉の頃にはもうウチといふ言葉は出來てゐたし、ハといふ言葉も萬葉に見られる。その卷十六には指羽といふ言葉があつて翳の事であり此からでも推量できよう。同じ歌からサシハの材料に鷲羽を用ひたこともわかる。當時の風潮として、六朝や唐の翳そのまゝのものが我國にも宮廷に用ひられたのであらう。サシハはもつと古く我古墳時代にも遡る事が出來る。上野國などの古墳出土の埴輪（ハニワ）樹物（ジュブツ）の中にも翳の形を寫したとしか考へられないものがある。古墳時代の人々が、けれども、この支那式の翳そのものをサシハといつたであらうか。それは解き得

ない事だ。サシハ——挿羽(サシハ)か、サシハ——カザシ羽か。その語原がわからないと同じやうに。

一方、扇をアフギと訓んだかどうか——これには小川睦之助氏所藏の「新譯大方廣佛華嚴經音義」の中に、扇の字に、萬葉假名で、安布伎と訓が付けられてゐる。この音義は文字から言つても、紙質から言つても、あきらかに奈良朝のものと見られるから、確實にアフギの訓はあつたといへる。

しかし、ウチハにしろアフギにしろ、この言葉が萬葉の古へからあつたとしても、一つはウチハ、一つはアフギとその用途が殆んど同じい二つのものに名付けられた理由はどうであらうか。ウチハ、詰り、翳と同じ系統に屬する團扇は、その本質からいへば萬邦いづこに於ても出現しうるものではあるが、とり別け唐の文化に親しい奈良朝の人々には、支那的な一切が撰び用ひられたと見る事はありさうな事であるから、この時代に人々の手馴れのものは、やはり

他の品々と同様に、唐風の團扇であつたであらう。さうすれば、支那式な翳にサシハの和訓がすでに出來上がつてゐたので、同じく和訓としてのウチハの名が此のものに與へられたと見られはすまいか。よしそれが次代に與へられた名稱であつたとしても、やはり支那式なものにふさはしい和訓が採られたであらう。それにひきかへて、純粹に日本に產れ出た他のアフギは、その初めにこそ名前は付けられずとも、名無しでは通らないから、自ら名がつけられねばならぬ。しかも、よるべき唐風(カラ)のかたい和訓では、日本のものにはふさはしい筈がない。やがて撰ばれた名前こそ、このものの効用に起因する素直(スナホ)な國風のアフギであつたと考へられはすまいか。國語動詞の連用形がよく體言に轉ずることがあるのは周知のことである。——アフギとウチハ、その名稱の根本的な相違は、かうした處に存するものと見られる。

三

さて、この萬葉の歌よりは暫々一世紀ちかく後に記るされた「古語拾遺」には次のやうな挿話が傳へられてゐる。

昔在神代に、大地主神、田營りますに、牛宍を田人に食はしめたまひき。その時に御歳神の子、其の田に至きまして、饗に唾きて還りまして、肤を父のみことに告げましき。御歳神いたく發怒らして、蝗を其の田に放ちたまひしかば、苗の葉忽に枯れ損はえて篠竹の似なりき。於是大地主神、片巫(志止止鳥)肱巫(今の俗の竈輪及米占なり)をして、其の由を占求はしめければ、「御歳神祟を爲せり。白猪・白馬・白鶏を獻りて、其怒を解めまつらな」とまをす。かれ教の依して御歳神に謝み奉らしければ、「實に吾が意ぞ。麻柄を持に作りて持ぎ、及、其葉以て掃ひ、天押草以て押し、烏扇以て扇ぎてよ。若し如此して出で去らずは、牛宍を以て溝口に置き、男蒸形を作りてそれに加へ(其の意を厭ふ所以なり)蓑子(古語に、蓑の字を都須と曰むなり)・蜀椒・呉桃葉及

び鹽を以て其の畔に班ち置くべし」とまをします。仍其の教の從せしかば、苗の葉復茂りて、年穀豐稔なりき。是は今、神祇官に白猪・白馬・白鶏以て御歳神を祭る緣なり。

いふ迄もなく、これは百姓達の忘恩をいましめた訓話ではあるけれど、廣く國内に行はれたであらう面白い上代の風習がこゝに偲ばれる。奇異な呪術は稔らん事を希つた事を示すものであらうか。烏扇であふいで蝗を追散らす事などは古代人の爲さうな事ではある。扇ぐ爲に用ひられた烏扇とは今日のウバタマであり、七・八月の候に黄色い六瓣の花を咲く可憐なヒアフギである。それが扇ぐ料として用ひられたのはとりもなほさず所謂葉扇(Blattfächer)の一型式である。原始人達に分布してゐる初期の團扇である。——後世、風習が一つの祭式に轉じ、この葉扇も摺疊扇とその位置を換へた事と思はれる。永く傳へられ來つた伊勢の御田祭に素朴な摺疊扇が用ひられてゐる事はかうした風習の流傳でもあらうか。同じ伊勢國の大歳神を祉つた小加良須神社では、この故事にちな

んで、後に巨勢金岡の描いた墨繪の烏繪の摺壁扇を豐稔のいのりに里人達にくばつたものだつた。

四

萬葉の歌々の多くがよまれた頃、卽ち奈良朝の人々の、とりわけ宮廷生活の一面は、尙ほ今日よく之をうかゞふ事が出來る。いふまでもなく南都東大寺正倉院の御物がある。我が祖先の手になつたものや唐土渡來の品々を含むのであるが、いづれをいづれと別け難い程に上古人の手先は器用であつた。天平勝寶八年六月廿一日正倉院に納められた「刻彫尺八」の面に示された婦女嬉遊の圖は有名である。數人の官女達が春草もゆる野邊に行樂する楚々たる樣をうつし出したものである。官女の一人の手にはあきらかに團扇とうなづけるものを持つてゐる。實物は傳へられてゐないけれど、この繪畫は、我國に於ても團扇の存したことを物語つてゐるのではなからうか。たゞ唐代の石棺の上にものされた刻畫にも、同じやうな場面同じやうな團扇を手にしてゐるのがある。唐代の繪畫、否それ以前の支那の繪畫には勿論團扇の圖は描かれてゐるし、種々な團扇にまつはる物語ももう陳腐なものとなり果てゝはゐる。しかし、我國に於ては此の正倉院のこれのみが團扇の存在したらしい事を、そしてその團扇の形を語り示してゐるに過ぎない。團扇と、いはゞ從兄弟の關係とも見られる麈尾（しゅび）は正倉院にも法隆寺にも今に傳へられてゐる。だが私は絕えて知らない、纖細優美な工藝を成し遂げた奈良時代に、たゞに一投足の勞にしかすぎない摺壁扇の存在したといふ事を。

五

奈良時代には扇がウチハを指したものであらうか、アフギを指したものであ

らうか。この萬葉の「山に住む人」の歌はどちらを示すと考へられやうか。——もし、この此の歌が「淮南子」の「夫夏日不レ被レ裘者、非レ愛レ之也。媛有レ餘二於身一也、冬日不レ用レ葛者、非レ簡レ之也、清有レ餘二於適一也」といふ句に負ふ處があるとすれば、この萬葉の歌の扇はウチハに違ひない。

摺疊扇のあらはれるには、なほいくばくかの歳月が特異な人の生れ出づるのを待つてゐたのであつた。

扇合せ

一

萬葉の世界は、心と心との觸れあふ世界である。赤裸々な心と心の相合ふは宴遊の世界である。歌垣（ウタガキ）はいふに及ばず、さま〴〵な遊樂の盛行は「梅をかざしてこゝにつどへる」の歌とまでなつてゐる。たゞに大宮人のみの間にさうした心の世界が展開したばかりではない。遠路はる〴〵と來朝する異境の人への心からなる慰勞の宴も當然そこには催されてゐる。南都七十餘年を通じて九州の鴻臚館は之が催筵の場となつてゐた。

異境の人をなぐさむる心はたゞに遊宴に盡くべくもなかつた。遊宴には必ず贈物がなされた。皇國への思出にそれらの贈物は玄海の荒海を凌いで渡つて行つた事であらう。

「續日本紀」には

（寶龜八年五月）癸酉、渤海使史都蒙等歸蕃、以大學少允正六位上高麗朝臣殿繼、爲送使、賜渤海王書、曰、天皇敎問渤海國王、使史都蒙等遠渡滄溟來賀踐祚、顧懸寡德、叨嗣洪基、若涉大川、罔知攸濟、王修朝聘於典故、慶賓曆於惟新、懃懃之誠、實有嘉尙、但都蒙等比及此岸、忽遇惡風、有損人物、無船駕去、想彼聞此、復以傷懷、言念越鄕倍加軫悼、故造舟差使、送至本鄕、幷附絹五十疋、絁五十疋、絲二百絇、綿三百屯、又緣都蒙請、加附黃金小一百兩、水銀大一百兩、金漆一缶、漆一缶、海石榴油一缶、水精念珠四貫、檳榔扇十枚、至宜領之、夏景炎熱想平安和、

といふ事が傳へられてゐる。これは御史大夫文室眞人淨三が老齡の故を以て宮中に於て鳩杖をたづさへ扇を持するを許された記事とともに珍らしくも靑史の上にものせられた團扇に關する記錄である。

檳榔扇——いふまでもなく、檳榔樹葉を以て編みつくられたこの團扇は渤海の使人ことごとくに皇國の思出を永く呼び起させた事であらう。ずつと後に、都良香の書き送つた扇の故事も、これにその先蹤を見出したものであらうか。

二

國都が平城より平安に移つてからも遊宴は打續いてゐる。心の交流する遊宴はやがて遊樂——娯樂に移り變る。日常の人々の社交が唯一の人生々活であつた平安朝の貴紳にとつては、心からなる遊宴ではなしに社交の場としての、又は慰安としての遊宴は、花によせ、月に呼びかけ數限りなく行はれてゐる。宴のたけなはなるに及んで座興として行はれた種々の興趣が、やがて獨立して一つの地歩を占めてくる。その興趣のみに人々の集ふ催が生れる。——詩合せ、歌合せ、そして扇合せなど。

これらの合せものは、既に平安の中期よりは古くに行はれてゐたに違ひない。詩合せは支那にも行はれてゐた遊戯である。詩合せに範をとつて、その流をくむものとして歌合せが生れる。かの亭子院の歌合せはその最も有名な、又古い一つであらう。詩が唐風である様に、歌は國風である。歌合せの出現は、とりもなほさず、力づよい國風の擡頭である。遣唐使の廢止はその結果であり、寧ろかへつて平安遷都がその緒を與へたと見られはすまいか。それは兎に角、合せものが一つの地歩をしめるとそれを催すに一つの方法・習慣が生れる。左右に相對して人々が座を占めて、判者がその所作の優劣を決する——これは歌合せ・詩合せの場合である。勝敗の如何が一座の興の高潮を導く事は、昔とて今と變はらうはずはない。扇合せも一つの方法があつたであらう。扇合せ、實はそれは歌合せから生れて來たものであつた。

三

第六十四代の帝、圓融天皇の天祿四年六月に宮中梅壺に於て扇合せをなし給うた記事が傳へられてゐる。六月といへば太陽暦の七月頃に相當するから、暑

氣の最も激しい時である。あつさをしのぐ扇がとり出された事は季節にかなつた遊びであつた。この扇合せは、實は、同年の五月廿一日に御兄弟の村上天皇の御子一品宮資子内親王のもとで行はれた亂碁の御遊の勝態（カチワザ）としてであつたのである。天皇がこの御遊で勝を得させ給うたので、人々にその御祝をし給うたのである。或は勝わざといひ、或は負態といひ、たゞに亂碁に限らず、いづれの遊戯にも後にそれに對して振舞をするのが當時の風習であり、どこまでも遊戯としての面目を全うするための行ひである。從つて、一品宮資子内親王におかせられても越えて七月七日、つまり今の八月頃七夕祭の日、内の臺盤所（ダイバンドコロ）で御まけ態の御振舞があつた。この亂碁（ランゴ）の御遊に關する勝わざ負態の一聯の有様を書きとゞめたのが所謂「圓融院扇合せ」として今に傳へられてゐる。これこそは扇合せに關する最も古い記錄であり、しかも幸にそれによつて扇合せの有様を窺ひ知る事が出來る記錄である。

この日――天祿四年六月十六日――殿上人・中將・少將等を從へさせ給うた圓融天皇は梅壺（凝花舍）に出御し給うた。梅壺はいふまでもなく後宮の一舍である。そこには公卿達と女房達のなごやかな集ひが見られる。どこまでも儀式ばつた集會ではなしに遊宴の風情である。この日の御わかち品としては様々な耕扇――つまり羅張の扇――十枚許りが銀製の桔梗の造花をそへた螺鈿裝紫檀の筥に入れてあつた。そしてこの扇にはそれ〴〵一首の和歌がよまれてゐた。唐製の羅を赤色に染めて一枚だけ張つたのには、

君が代を松ふく風にたぐへてぞ　かへす千年のためしなりける

淺みどりの羅を張つたのは恐らく銀骨であらう、これには、

澤に住むたづの羽風に涼しきは　君が千とせをあふぎなるべし

扇骨は紫檀、これにはられたのは赤色と藍色との二枚の織物であつたであらう、これが二藍（フタアイ）の色調をしめしたといふ事である。これには、

秋來ぬと風の音にもあふぎつゝ　そらを袂にしらむとぞ思ふ

次の扇は、青色と蘇芳色の繊物を二つかさねて張つたものか、青色の骨、蘇芳の繊物の扇面であつたであらうか。それには、

めづらしき聲ならなくに時鳥　こゝらの年をあかすもあるかな

次の扇は青色の扇面、住吉の風景が描かれてゐる。その歌

住吉の松のかげをしこめたれば　あふぎの風のいつかたえせむ

この他になほ五枚の扇はあつたであらう。この歌々は或は葦手に縫取りをし、或は書かれて扇面の意匠・文様と相映りはえてゐた事と思はれる。右の十枚の扇が、やがて互に競べ合はされたものであるのか、將又、後日負態をし給うた一品宮の御扇どもと、その歌や、その意匠・技巧の優劣が競はれたのであらうか。

同じこの年七月七日、一品宮の負態は内の臺盤所で行はれた。沈の筥に入れ

られたそのひあふぎ（緋扇類）は同じく十枚である。この度の扇も亦勝わざの時と同様な裝飾がなされてゐた。

住の江に浪うつまでと思ひしは　松吹く風のなごりなりけり

天の河あふぎの風に霧はれて　空すみわたるかさゝぎのはし　中務

これらの歌は扇に張られた輕羅（ウスモノ）にかゝれたものであらう。

又今度は、なほ別に、筥に二藍の羅を敷物にし上にかはほり（蝙蝠扇）を十枚入れて出されてもゐた。

金の骨、朽葉色の地紙には

何なれやあふぎのかぜもわぎも子が　衣の袖にあきしきぬれば　右大將（大入道殿）

骨は沈、扇面は朽葉の羅、これに假名で、

天つ風あふぐともゆめ霧たつな　こはたなばたのおれる錦ぞ

これらの歌々があしで書にかきなされてゐた。

この負態の後に、日のおまし（清涼殿の身舎）で上達部（カンダチメ）等が多く集ひあひ彈正宮章時の琴、兵衛督の箏、源博雅朝臣の横笛、源宰相忠清の笙などのかなで出だす管絃の音は深更にいたるまで打つゞいたといはれる。

この圓融天皇の御時の扇合せを後に傳へて、西行のものしたといふ「撰集抄」には九條殿でなされた事と變り記されてゐる。そして女房の中務のと、大中臣能宣のと、この二つの扇がその歌や意裝によつて勝を占めて、こと扇どもは打棄られて顧みられるべくもなかつたと述てゐる。

この「撰集抄」の記事から、はからずも、鎌倉時代の扇合せの一般を推しはかる事が出來る。それは歌合せの場合の樣に歌が主であり、扇そのものは從であるといふ事である。どこまでも歌の世界であるといふ事である。

眞實、圓融天皇の頃も扇合せはこの鎌倉時代と同樣に、歌合せの延長であつたであらう。

四

以上が圓融天皇の扇合せについてのあらましである。

さて、この扇合せに持出された緋扇の意裝や文樣や歌詩もさることながら、扇として興味を牽くのは何といつても輕羅をはつたそれである。この扇どもがすべて今のやうな摺疊しうる扇かどうかといふ事である。

「秋來ぬと風の音にもあふぎつゝ……」といふ一首のかゝれた扇は既にあげた樣に二藍の色調を表はす爲に紅花と藍二枚の羅がはられてゐる。この一群の扇は、果して摺疊扇であらうか。さう見る事は技術的には甚だ困難な事であ一のものとは甚だしい相違をみせてゐる。從つて、扇の兩面から輕羅を張り合は

す事は至難である。この一群の扇をウチハのたぐひのものと解するならば技術の點からだけでは容易なものとなし得られる。しかし、もし摺疊扇とするならば少くとも細い骨のものではあるまい。檜扇の様な、骨の一本々々が廣い幅をもつた、しかも厚さの薄いものでなければならないであらう。この形式の扇は後の世に平骨といはれる種類のものと考へてよからうか。實際、平骨以外には扇に輕羅をはる事は、平凡な技術では困難な事である。まして、「圓融院扇合せ」の記事の後段、卽ち資子內親王の御負態の際にはひあふぎ十枚の外にかはほり十枚を入れた事は既述の通りである。ひあふぎとかはほりと、この二つを並べて書き記るされてゐる處に甚だしい興味を引かれると共に、何かこの羅張の扇の解明の鍵がそこに秘められてゐる様に思はれてならない。——つまり、このひあふぎが眞名で緋扇と當てられてゐる事から、それが常の檜扇ではなくて、輕羅の様な繊物のはつてある扇である事を指してゐると

思はれる。そして、それがかはほりと對照させられてゐる點で、どうしても平骨系統のものとするより他にいたしかたがない。もつとも、同じこの資子內親王の御負態の時に持出されたかはほりの中にも輕羅のはられたものがある。「天つ風あふぐともゆめ翳たつな……」といふ藤原の爲光の歌のかゝれてゐる扇はそれである。從つて、あながちに羅張の扇がすべて平たい幅を持つた骨に張られたものばかりであるとは考へる必要もなく、細い骨にもそれがあると見て差支へはあらうはずもない。ひあふぎとかはほり——それがともに羅張の扇である點では決して差異のありやうがない。たゞその相違を見出さうとするならば骨の異り、卽ち平たい骨、丁度檜扇の薄板のそれのやうなのと、一つは細いまるで手指の骨のそれのやうな細骨と、この二つに求めるより他に仕方がない。こんな細い骨に羅綾が張つてあつただけでも、既にこの時代の扇の技術が最早や素晴らしい技巧にまで達してゐたといふ事が出來る。唐木の沈香や紫

檀、將又、金や銀の骨。扇面には唐土船載の羅（ウスモノ）や唐紙（カラカミ）、それに革手（アシデ）に書きちらした歌――それも書様までも、既に一つの書方が定つてゐた。こんな優美な工藝が、そしてこんなやさしい調和が、平安朝の中期の初頭には、完成してゐたのである。平安の時代の進展とともに益々隆盛を極める纖細美は、圓融、花山、一條といよ〳〵浸み渡つて行つたのである。

五

しかしながら、この様に、圓融の帝の御時に、こんな技巧の秀でた扇のあつた事が記錄せられてゐるけれども、この時代の扇の實物が一本とて未だ見出されてゐないのは、まことに不幸な事である。

文獻の上だけで、扇の存在を云々するならば、ひとり「圓融院扇合せ」を以て最古のものとする事は出來ない。既に村上天皇の御代には扇に繪をかく事が行はれて、村上天皇の御製に「たなばた祭かける御あふぎにかゝせたまひける」と詞書のあるといふ一首が「拾遺集」に拜せられるし、元輔の「夫木集」の中の一首にも五葉のもとに岩ねになでしこのある一品宮の御扇をのべてゐる。同じく歌人として高名の壬生忠岑の歌として

夏はつる扇と秋の白露と
いづれかさきに置かんとすらん

といふ一首が「新古今和歌集」に載せられてゐる。これは延喜の御時、卽ち醍醐天皇の御代に月次（ツキナミ）の屏風に詠んだものだといふ事がその端書（ハシガキ）に記されてゐる。「貫之集」には

あふげども盡きせぬ風は君が爲
我志さす扇なりけり

といふのがある。又同じ集には「つねすけの中納言のあふぎあはせのうた、扇はすはまにいれたり」との詞書も見られる。これらはともに醍醐天皇の朝のものであらう。

同じく、醍醐の朝にあらはされたと見られる「竹取物語」にも口笛（クソ）を吹き扇をならして好色の貴人がかぐや姫をいざなふ處が見える。

いや、これらよりもなほ數代古く、「三代實錄」には

（貞觀十四年）八月己亥朔、王公已下侍二左仗下一、會飲至レタ、勅賜二五位已上見在坐者御扇各一一、親王已下皆起舞踏、

と記して清和天皇の朝に扇の存在した事を傳へてゐる。これは遊宴のかづけものである。扇を戴いて拜舞して行く人達の有樣が目にうかぶ。恐らく扇（アフギ）であらうか。後世に、よく扇を戴いて拜舞する事がのべられてゐる例から推察する事は無理であるかも知れないけれども。

否、この「三代實錄」の記事にも勝つて古い記錄は、小野宮實賴の手になつた、彼の「古例なり」といはれる「西宮記」に引かれた記錄である。四月一日給扇儀の事を記した同書は、承和例による事をのべてゐる。「續日本後紀」にこそ、その給扇の記事を欠いてゐるけれど、實賴の頃には、まだいき〳〵とした仁明天皇御在位當時の記錄をつたへてゐたに違ひない。この樣に國史に記事を欠くといふ事はよく有る事である。あながち承和の例を否定するわけにはゆかない。承和の十四年間のいづれかの年にあつたであらう給扇の事、その給扇の扇を摺疊扇と見たいのは誰しもである。そして、さう見ようとする人達にとつては、彼の敎王護國寺に傳來する辛櫃（カラヒツ）に描かれた繪は、確かに好都合な實例でなければならない。

古來延喜の辛櫃といひなされたこの辛櫃（傳）の眞否は、一に其形・其姿のふるめかしさに懸つてゐる。人は或は貞觀代の作とも推定してゐる。こんなにも

古いと見て差支へなさそうなこの櫟材の辛櫃は、高さ三尺縦横それにかなふ充分な大きさをもつてゐて、其身の周には古風な風俗畫が描かれてゐる。今は失はれてゐる蓋にも繪があつたと考へて宜いであらう。——この身に描かれた風俗畫は、今はもう年代の風塵の爲に殆ど消失しかけながらも、かすかに跡を止めてゐる。注意すれば、それが鷄籠を中に數人の大人小兒が打ちながめてゐる鬪鷄の光景を正面に、背面には、今日のお手玉遊戯のあの弄玉を行つてゐる一藝人を中心に四人の老幼がその技に感じてゐる場面がゑがかれ、兩側はそれ〳〵この二場面の觀衆が若干描出された、このめづらしい風俗畫を見出すであらう。取別け注意しなければならないのは、四面の風俗畫すべてに、恰も折り疊んだ細骨の扇そのまゝの持物をもつた人物が一人づゝ表出されてゐる事である。これこそは最古の扇の表現であらう。勿論この辛櫃の人物の服裝はすべて純粹の和風ではない。短袖の唐服である。そしてそれに扇らしいものが現はれてゐるのだ。しかし開いた形の扇や、又はもつと適確に扇を指示する姿が他に描かれてゐないので、唯一の例——この例だけで扇の存在をこの時代に言張る事は大膽であるかもしれない。まして、この辛櫃が明確に貞觀・延喜の代のものとする事は出事ないので。或は同寺所藏の有名な山水屛風のそれのやうに平安中期の作で、唐畫を描いたものかも知れない。ことにこの扇に折りたゝんだ厚さが示されてゐない事は尙更一抹の不安を漂はせてゐる。けれども、扇と團扇とを截然と區別した「和名類聚抄」が延長年間（一五八三—一五九〇）に第四公主（慶子內親王か、勤子內親王か）の爲に源順によつて撰集せられてゐるとこ

ろを見ると、醍醐天皇の御代には確實に扇があつたといへる。「三代實錄」の記事、又承和給扇の例が扇であるのかないのか、それはわからない、たゞそれをさへ扇と見たいのが人情である。

しかし、こんなにも古い二三の資料は、どこまでも「らしく」思はれる資料で

ある。決して扇で「ある」資料ではない。

六

たゞ、事の適確を求めるのは近頃の人情である。理窟の多い針の様な神經に化し了せてゐるのが通例である今の世に適する爲には、今一層突き進んだ合理的な見解を、この扇の初現の時期についても遡べねばならないかもしれない。しかし、物の初現といふものは、得てして、後世之を立派にいひあてる事は先づ當時記錄されてゐない限り不可能な事である。そんな狹い冷やかな心よりももつとゆとりのあるおほどかな心でありたい。しかもその中に正を握つてゐるのでよいのではないか。

實際見方によつてはウチハであるとしてもアフギであるとしても共にあやまりとはいへないこの様な初期の文獻や繪畫からは、決して確定的に扇の初現の時期を定める事は不可能である。しかし、この曖昧さの中にも扇の創時が想ひ浮べられる。ひとまづ奈良朝を以て扇のなかつた時代とし、他方「和名類聚抄」の記事を決定的な資料として、この兩者に狹まれた前後約百年の間に點在するそこばくの徵象をたどり行くならば、こゝに何とはなしに延喜をさかのぼつた若干の年代に扇の初現の時期を認める事が出來る氣がする。——それでいゝのである。それ以上を望んでも、所詮はその年月日を決定する事が出來るにすぎない。そしてたゞそれだけの事でしかないではないか。

この延喜の前後は國家的にも一大變革の釀成せられた時期であつた。ながらくうち續いた唐風を脫却して、國風の文化が伸展してくる時期である。それが行爲にあらはれたものとしては、遣唐使の廢止がそのめざましいものであり、日常生活の微少に至るまでその精神は觀取できる。すでに唐式を去つた朝儀には最早や唐式の禮服では調和すべくもない。唐服の改廢は實行にあらはれてく

る。禮服に替る束帶・衣冠が、國風の儀式を一そう潤美なものとすることになつてきた。支那式な唐服持笏に威儀を正した百官は、今や束帶・衣冠にあひもかはらず笏を正して正座しながらも、懷中には檜扇を欠くべからざる服飾とする公卿と變化してきた。平安朝中期以後に於ては、これこそが正裝であり、これが規範となつたのである。はからずもこゝに檜扇がその服制の上に一つの地位を得る結果となつた。檜扇は和風の浸透のもたらす產物といへないだらうか。アフギこそは和風であるといへないだらうか。

七

束帶・衣冠に檜扇が懷中せられる事、やがてそれは又禮服の場合にも扇が懷中せられる事になるのであるが——この事が或は檜扇の出自をものがたるものかもしれない。

では、檜扇の出自は如何。この様な問に對しても勿論明確に立證する事は出來ない。たゞ、もつとも「ありさうな」經路を空想するだけで滿足せねばならぬ。それを見た事もない今の世の者共が、今の世の考で、最も合理的だと思ふに過ぎない。——しかし發明、發見は天來の霹靂の様に、天の啓示の様に突然人の世に起つてくる事も認めなければならない。しかし、この偶然はどうしても今からは推し量り得ない事である。たゞ「合理的な」といふだけで滿足すべきである。

先人達は既に檜扇の出自について二三の見解を披瀝してゐる。一つには、檜扇の一枚一枚の薄板の形狀が笏の形によく似てゐるといふ理由から、この笏を幾枚も綴じ合せた所から起つて來たといふのである。この說には、尙一つ笏がその板の上に紙などを張つて、それに儀式の次第や、其他重要な出來事等を書きしるして備忘の用にそなへたといふ話と、檜扇にも同樣な事がなされた場合があつ

たといふ事から、この相似た共通點を取上げて、說の合理性を强調してゐる。又今一つには、檜扇の薄板を絨じ合せた糸、或はこの糸の餘りに數色の色糸をたれさげてゐるといふ事實が、あまりにも宋・高麗等の樂器の一種——拍(バク)——に類似してゐるので、この拍も薄板の絨ぢ合せである事から、これが檜扇の前身であるといふ說もとなへ出されて來た。——樂器と檜扇、この兩者に存する關係は、同じく薄板であるといふ事、色糸で絨ぢてゐるといふ事以外に、どこにもつと本原的な結合があるのであらうか。或はいふかもしれない、彼の「竹取物語」の例に徵するまでもなく、後世にもよく檜扇をならして人をよぶといふ事が故實書にのべられてゐるのは、それが卽ち、かつて樂器であつた證據であると。しかしながら、それは檜扇が利用せられたにすぎない事である。本來樂器でない笏も周知の樣に笏拍子として樂器の一隅を占める事すらもある。大聲をたてゝ人を呼ぶなどといふ失禮な所作は、とうてい檜扇をほとほととならして呼ぶ優美に及ぶべくもない。優美が生命である王朝生活を思ひ見る時、その感が深いではなからうか。まして、檜扇の絨糸(トヂイト)に五色・六色の數條の色糸を垂れ下げる如きは、遙か後世の產物である事を知るに及んでは一層この說の薄弱さが感じられる。

この後の說にくらべると、前說はより一層の妥當性を持つてゐる樣である。檜扇の薄板一枚一枚が笏と酷似する形をもつてゐるからといふ前說の理由付けの一つは、初期の檜扇の形狀が今日知るよしもないものであり、平安末期の、それでも現在最古の二三の遺品の形狀が遙かに笏よりは異つてゐる事實などから、この理由付けは決して力あるものとはいへないかも知れないが、第二の理由付は注意してもよいのではあるまいか。僅かばかりの出來事を書き付けて備忘とするには唯一枚の笏だけで足りやうけれども、暗記するにも容易でない種々のしきたりには到底笏一枚といふわけには行かない。まして、笏が依然として

正裝に必要である以上、備忘の爲には器を改めて携へねばならない。その初めは笏に押紙（オシガミ）位を添加して事足りた行事や規範が、その時々の偶然迄も含めて量を増して來ると、到底笏一枚ではたりなくなる。いきほひ何枚かの追加が必要であり、こゝに改めて備忘專用の器（ウツハ）が生れて來なくてはならない。そこには其の生れを告げる笏の形が寫し傳へられるといふ事は最もあり得べき事ではあるまいか。まして、例の嚴島神社現存の葦手繪檜扇等を一瞥した者が、誰れも氣付く樣に、檜板一枚一枚の綴り合せが丁度一冊の本のそれのやうに一側のみでなされて目ざす處を容易に開き得る——まるで板の本の樣な構造をもつてゐるといふ事實がある。これこそ、まことに懷中するに都合よい備忘錄といはねばならぬ。笏起原の說を支持するのにはこれなどは恰好な資料とならう。

しかし、檜扇の出自を、この樣な笏に求める說に對して、又かうも考へられない事はない——薄板を恰も羽團扇のそれのやうに上下の二ヶ處で綴ぢ合はせた翳の類から生れ出でたのであると。檜扇にあるあの上の方の綴目はそれを物語るに充分なものだと見られないでもあるまい。江州坂本村出土の銅製檜扇の一枚は上方の兩側に綴孔をもつてゐてこの說に根據をあたへてゐる。扇といふ名稱が實際アフグといふ動作に因由してゐる事なども、この說の一つの足場となるであらう。

——軍配はこれらの諸說どちらにもあげ得ると見えるだけだ。

八

さて、この樣に檜扇の生れについては、兎も角も數說をかぞへる事が出來、又それ等がとも角も一應の合理性を含んでゐる事は認めねばならない。

次に、檜扇と終始相對立して永く今日迄も通行してゐる他の一つの扇型——勿論それは紙を張つた紙扇であるが、その側に於てもその創始について幾つか

の起原説がのべられてゐるのは當然な事である。

で、いふまでもなく、例の笏の押紙、備忘の用としてのこの張紙によつて幾枚かの笏の綴られたものを想像すると、一つの紙扇が何のこだわりもなしに自然にあらはれてくるではないか。——かういふ安易な、そして充分に首肯させられる出自説が可成古くから行はれてゐた。これは笏に檜扇の始原を求めようとした所説に糸を引く考へ方である。笏を檜扇の母として疑はぬ人は、どうしてもこの紙扇の出自説をうけ入れねばなるまい。

この考へとよく似た考へ方に、檜扇の板のそれ〴〵を綴り合はす糸の代りに紙を張つて板を連結させた事から紙扇が生れたのだと主張する見方もある。この説も前説と同じく笏起原とする事が出來る。そして紙扇にも扇面に歌などを書き記す事が古くからあつたので、これも亦備忘の控から轉じて來たものだとみれば、ます〳〵笏より生れたといふ所説に重さを加へる事とならうか。しかしながら、檜扇も紙扇も、ともにこの様に笏起原であるとするならば、なぜ檜扇は正裝に、紙扇は、平安中期以後はいつもさういふ規範であるやうに、略裝にのみ用ひられねばならないのだらうか。これがかへつて紙扇を檜扇から生れたとする卽ち第二の所説の根據となるのであらうか。

たゞ、問題は、果して古い紙扇が充分にこれらの笏起原であるとか檜扇起原であるとかの考へ方に當てはまる様な構造をもつてゐるかといふ事に歸する。この場合でも、創始期の紙扇が今のところ見出されてゐないのが大きな支障となつてゐる。——しかしながら、平安朝の中末期のものと考へられる一二の紙扇の現存する事はせめてもの慰めである。これらの構造を見ると親骨（オヤボネ）も、中骨（ナカボネ）もともに細骨でありながら、その厚さその形共に同一で必ずしも檜扇の薄板のそれの様な厚さではない。しかし、これは紙扇をつくる工人が檜扇の工人とは別で、經師などであつた事からかもしれない。あの巻物の表紙の芯に用ひられる材料

と扇骨とがよく似てゐる事は、他方紙をあつかふ人が主に經師であつたから、自然さういふ人々の手に扇の工作がゆだねられたと解するよすがともなる。さうすれば、あながち、扇骨の形狀だけで檜扇起原を否定する事もできない。

けれども、諸事に華美をきそつた王朝中期に、天下の綱紀を引きしめたまうた後三條天皇が古い檜扇の薄板をよせあつめ給うて、御自らこれを細めて紙を張つて紙扇となし給うた事をつたへる記事がある。當時の人々は天皇の御儉約をたゝへるものとして語りつたへてゐるが、はからずもそれが、當時の一般の扇の形式と異つてゐる事をつげる資料となつてゐる。當時一般の扇は、とりもなほさず、この後三條天皇の御作りあそばされた紙扇とは異つた、先にのべた樣な紙扇であつたのである。もし、紙扇を檜扇より生れたとするならば、もうこの頃にはその出自をものがたる根據すらもとゞめ得ないまでに變つてゐたのであらう。

九

檜扇にしても、紙扇にしても、その出自についてはこの樣にいろ〳〵に考へられる。どれもこれも、尤もらしい考へである。しかしながら、どれもこれも正しくさうだといふには何らか不安さをもつてゐる。物の出自といふものは大概かういふものである。後世からは單にそれを空想するだけにすぎない。

ともかくも、何から生れたにせよ、檜扇と紙扇とは平安中期初頭には兩々相併存して王朝の社會に、ふかく日常生活に根をおろしてゐたのである。それでこそ「扇合せ」の遊びも行ひ得たのである。

夏扇と冬扇と

話は再び「圓融院扇合せ」一巻にもどる——そこには上來度々擧げた様に

ひあふぎ　と
かはほり

との二つの扇の種類が既にならび用ひられて、その名稱のことなる様に、その形の上にも相違のあつた事が認められる。ひろく一くゝりにして扇といはれる中にも、この二つの種類があつたのである。そしてこの二種類が扇の基本的な形態として、中にその時々に、さまざまゝな變化をともなひながらも、その後一千年もの長年月の間今も尚變る事なく現存してゐる。

その各々がどちらが先か後か、そしてどちらが何時頃世に生れたものであるか——かういつた事は、今は全く不明といふ他はないけれども、天祿の四年に

は既に兩者がそれ〴〵の名を負つて存してゐたのであつた。又そのそれ〴〵の名前も、もう人達には良く知られた品物の名として通じてゐたのであるといつていゝであらう。

ひあふぎとかはほり、この二つの名稱は「圓融院扇合せ」には多く假名で書かれてゐるけれども、この各々に眞名（マナ）をあてゝ書き記るされたものは、奇しくも唐土の書物に殘つてゐる。

稱其國永延二年歲次戊子二月八日實端拱元年也、又別啓、貢。（中略）、納金硯一、鹿毛筆、松煙墨、金銅水瓶、鐵刀、又金銀蒔繪扇筥一合、納檜扇二十枚、蝙蝠扇二枚（下略）

これは「宋史」の日本傳の文面である。僧の奝然が彼地の恩恵に答へて贈つた贈呈の品目の一群として、その後ながく諸書に寫し書かれてゐる文面である。檜扇はヒアフギであり、蝙蝠扇はカハホリである事いふまでもない所である。奝然のこの贈答に對する一文は、宋史に

いふ様に裔然のもたらした目錄を、ありのまゝに書きうつしたものなのであらう。天祿四年扇合せの年からこの贈答品を送り出した永延二年までは、ほとんど十六年間よりへだたつてはゐない。國語でいはれたヒアフギとカハホリが、もうこの時にはそれ〴〵に眞名があてられてゐたのである。裔然の發明であらうか、なからうか。平安中期以後にはいつもこの二種の漢字が、決つた様にそれ〴〵に用ひられてゐる事から考へると、恐らく、たゞ一片の贈答目錄の爲に卽時に發明された漢字ではないであらう。裔然の時にはすでに天下流行の文字となつてゐたと見るのが穩當である。二種の扇のそれ〴〵の出自は別として、一つはその製作の材料から檜扇、又一つは取り別け支那では吉祥語である蝙蝠がその和名の音の相通からカハホリに當て用ひられたものであつたのではなからうか。四時に、晝夜に、生の喜びをたゝへ千秋萬歲樂未央と、人生の愉悅を謳つて、人生を、生活を、粉飾してゐた王朝人の心理からは當然この吉祥文字

—蝙蝠—が流用せられて何の不思議があるであらうか。

たゞ、檜扇の方は、後世の例の様に主に檜の薄板の綴合せからつくられてゐたと思はれる。この時代の調度の世界は、手のこんだ華美なものの他には清楚な曲物（マゲ）が大勢をしめてゐた時代であつた。木をとりあつかふのにはもう充分に發達した技術をもつてゐた。薄い檜板も鑓鉋（ヤリカンナ）で思ふ様に作られたのである。檜扇の形が一度現はれると、これは曲物師の手によつて何の雜作もなく次々と製作せられたと見える。檜扇を使用する人達が急速度に增加したのも、亦この製作の發達をうながした事であらう。その初は笏木（シャクギ）卽ちイチヒなどから作つたかも知れないこの種の扇が、工人の最も手なれた又加工し易い檜板でつくられる様になつてから、檜扇の名稱がこの種の扇を代表するものとなつたと見て差支へはないであらう。

それにしても蝙蝠扇とかきあらはされたカハホリは、そのめづらしい漢字か

ら、後の人々を思はぬ空想にはしらせたものであつた――「飛びかふ蝙蝠を見て作り給へるなり」とは、古く鎌倉の中期までには出來あがつてゐた想像である。成る程、蝙蝠扇といはれるものは、その骨數も少く、裏面にあらはに出てゐる骨と骨とをつなぐ大きな扇面は、さながら一匹の蝙蝠の手翼をひろげた有樣である。カハホリがカウモリ扇といはれる樣になつたのは、もうこの扇の創始をはるかにへだゝつた時代であつた。

既に、永延の頃にはカハホリに蝙蝠扇の文字が用ひられてゐるけれども、この樣な起原說は動物のあの蝙蝠から紙扇が出來たとする一つの偶然を思はないかぎり――それはあるひはそんな偶然があつたのであるかもしれないけれど――今は一つの合理的な名稱の解釋が、丁度檜扇の場合に成り立つ樣に、なされてよいであらう。檜扇の名稱が其の素材から來てゐるとすれば、カハホリも亦同樣に素材に名稱の起原がもとめられはしまいか――カハホリが蝙蝠ではなしにカウハリであり、それは紙張りであると見ようと思ふのである。檜板で出來あがつた一類の扇が檜扇であるのに對して、檜板の代りに紙を張つた扇が、紙張り扇といはれたと思ふのは無理でないであらう。それがカハホリである。それが蝙蝠扇である。たゞはやくからカミハリといふようなギゴチない呼び方をせずに滑らかな音便からカハホリ、蝙蝠扇となつたと思つてあやまりではないであらう。

これは容易な名前の解釋である。しかし、その呼び方からはせずに、或は文字から、或は何等か秘められた樣な解き方が、思へば古くから起つてゐた事である。まるで安易平明につく事が、何だか一かどの人達には身が傷つけられる樣な氣がしたものだつたのである。幽玄な、教義ありげな解釋が學者らしいものとしてむかへられたものであつたのである。

二

妻子珍寶及王位臨命終時不隨者、

まだ藏人辨（クラウドノベン）であつた藤原道兼が手に持つた一枚の蝙蝠扇の表に書かれたこの一齣は、いたく花山の帝の大御心を打ち奉つた。さなきだに世をいとひ給ふ帝はその夜寛和二年六月二十三日花山に御落飾を遂げさせ給うたのであつた。もとより天皇の御讓位をねがつてゐた藤氏一門のはからふところであつたのである。蝙蝠扇にまつはる空前であり、絶後である艮れ多い哀史である。

寛和・永延より寛弘・長和そして寛仁へと、かくて世は藤氏擅權の時代に移り行き、滿つ月に我身を比する道長の頃ともなれば、京洛三里に汲むともつきぬ歡樂が艶麗の花を咲きほこつた。艶麗は年若き女性の姿である。藤原の時代が女性的な性格をもつといはれるのは、蓋し當然としなければならない。年若き女性

は美はしく、しかも情的である。物の心に律動的に相ふれるものをもつてゐる。藤原の時代が、この感覺的な相をもつてゐるのは亦當然である。移り行く四季に敏感にふれ、森羅萬象の眞相に接し得た當代の人々は、內に無限の淨土を求める心をはぐくみ、外に自然をうるはしくながめる心を發展させた。咲く花の姿に、ふる雪の寒さに、自然の色のこまやかさを感じ得たのもこの時代なればこそである。感じ得たものを表はさうとするのは人間のもつ共通な意圖である。花を葉を、水を、氷を、そのもつさま〴〵な感じのまゝに、その持つ色の美さに應じ、そこに生み出したのは彼の色目（イロメ）である。まことに白・青を以て柳であるとか、經は青、緯は白に織られた色調に水を見出すとか、さま〴〵に組合はされた色の調和の感覺こそ、人間の感性の至高なるものゝ一と云へないだらうか。色を感ずる心には、多分な機智性が含まれねばならない。曲であり曲でなく、直であり直でない扇面のもつ機智的なものが、この藤原の時代に

迎へられたのは故なしとしない。それは充分に藤原的な性格をもつてゐるといへやう。色と姿との調和、それをしも亦この扇は荷つてゐる。

冬扇と夏扇――これが檜扇と蝙蝠扇の各々に與へられた新たなる名稱であつた。果していつ頃から、こんなに呼びなされたものか。既に平安中期には、檜扇とか、蝙蝠扇とか、こんな男性的なひゞきをさへもつた呼び方と併んで、冬扇・夏扇と優にやさしく呼びなされてゐる。檜扇のもつあの重厚さ、板をしげく重ねたあのあたゝかさ、カハホリのもつあの透きとほるやうなすゞしさ、それはそれ〴〵に冬扇・夏扇と呼ばれるにふさはしい。實際に用ひられた季節からいつても、それは冬でありこれは夏である。季候に對して感じやすかつた當代の人々は、日常の生活のそれ〴〵に季候の支配をうけてゐた。そしてそれが各〻冬のもの夏のものと呼びなされた事は、あながちに實用的な方面からのみではあるまい。冬の感じ夏の心を深く察し得たからの所産でなければならぬ。

都大路に春老けて、燕の巢のいとなみもしげくなると冬の衣は夏の衣と袭をかへ、四月一日の朝は、東帶に夏の來たるを知つたのであつた。王朝の盛時には、もう既に年中の行事としてとり行はれてゐた。孟夏の旬（ジュン）の給扇の儀式も、此月此日に行はれてゐる。夏の初頭に一夏の冷をさそふよすがとして宮仕（ミヤヅカヘ）の人々に扇を下し給ふ儀式である。

（上略）其儀、內侍取二盛レ扇楊筥一、出レ自二御帳北一、坐二御屛風南妻一、目二出居次將一、次將進取之、立二王卿坐前一給之（片手取レ筥、片手取レ扇給也、給者先懐二中扇一、把レ笏起坐、更挿レ腰賜レ扇、又把レ笏復坐、賜畢、次將跪、置レ筥二自料一、以二楊筥一置二大盤下一、

と、「北山抄」は、その儀の有樣を記してゐる。

人々はこの卯月の朔日を堺として一切を夏の袭にとりかへた。勿論、扇も夏のそれが持たれたのであつた。しかし、唯、山城の一宮加茂の神事に關してのみは一つの異例がみとめてゐた。しかし、山城の一宮加茂の神事に關してはかなり規則たゞしい冬夏のきじめとなつ

られてゐた。卯月中の酉の日、祭の行列の往(ユキ)は冬の扇、かへりは夏の扇といふ事がそれである。葵祭が無事に濟んで四・五・六と月を重ねるに從つて酷暑は益々たへがたいものとなるけれども、水無月の祓(ハラヒ)を一期として節(セツ)は秋とかはるのであるが、七夕の夢は殘暑の中にすぎ、夏の裝束はなほ天下を風靡してゐる。孟夏の旬に行はれた給扇の事は、四月に起つて九月に盡きると記るされてゐるのを見ればこの半歲の月頭はいつも扇を給うたものであつたらうか。この日、左右の近衞、左右の兵衞、つまり四府から內侍所に付して奉る扇は檜扇であつても、上よりは暑氣をしのぐべき夏の扇、それをこの月から月々賜うたと思はれる。扇に換つて氷魚を下賜された孟冬の旬は、十月の一日にとりをこなはれた。これより節は冬、衣も冬、扇も冬、と夏の名殘を五節の舞の頃まで傳へて、世は冬の世界に一變する。

夏扇と冬扇、この二つの對照した扇の系列が半季〳〵を代表して、一歲通じて持たれた持代(シロ)の優なるものであつた。

大君の御いのちを春秋無窮と恒常の姿でこひねがひ、春秋不變の調和に一歲を考へる平安朝は、又夏と冬のけはしい對立に一年を思ふ平安朝でもあつた。

三

けはしく對立させた夏と冬と、それは益々そのもつ特性を峻嚴にする。夏の夏扇、冬の冬扇はその性格を峻嚴なものとされてくる。夏扇はどこまでも冷氣をさそひ、繁雜をさけようとし、冬扇は出來るだけあたゝかさを、冬の氣分をたもたうとする。古く「常陸風土記」にある樣に「夏すゞしく冬あたゝか」なるをもとめる心は、同じ血につらなる日本人として、この平安の時代でもやはり人々の心にやどつてゐた。

しかし、溫さを主體とはするものゝ、この冬扇は、尙ほ式正なるものとして、

夏ですらも、「これは」といふ場合にはもたれたものであつた。そこにその用に従ひ、位に従つて、種々な種別を生じる結果となつた。そして、それが一つの故實、しきたりとして襲用せられる事となつてくる。

かみ御一人の御檜扇は蘇芳染、皇太子亦同じく蘇芳の御檜扇。總じてこれらは赤(檜)扇とよばれ、公卿・殿上人達の白檜扇と區別せられた。皇太子の御扇の胡粉を以て素地を染めなし、それに蓬萊の文様の畫かれたものゝあつたのは、太子の御いとけなき頃の御扇である。彼の横目扇の尋常の童の持代と別たん爲の業である。それとは又反對に、御即位の折などに着せられる禮服の場合に臣下ですらも蘇芳で染めた檜扇を持つべしとするならはしがあつた。安徳天皇御即位の折は人々白檜扇を用ひたとあるけれど蘇芳に染むべきであらうとのべられてゐる。この蘇芳の檜扇、即ち赤扇こそは帝の御扇である。日の御子の御大典に際して臣下すらも日の色を持ち得たのは、無邊なる天皇の御恵である。太

子の白檜扇は、下々のものゝ中より撰び取りたまうた事であり、禮服の赤扇は上のものを施したまうた事である。共にありがたき極みである。まして帝が臣下の用たる白檜扇を御持ちになる事のあるのには、いよ〳〵皇恩の厚きを思ふのである。宿徳の人は香をたきしめた、世にいふ香(染)檜扇を持つ事が、平安朝も半を下つた保延四年二月の春日祭の宇治丞相頼通の持料で知られる。赤扇の華麗さと、白扇の清楚さと、そして齢を重ねた老人の靜けさの中に積る年功を一本の扇に語る香ノ扇の澁さと、この三者は、根本的には檜材の無地から出來てゐる白檜扇を母體として、しかもその中からくみとられた平安朝の色であつた。王者の色を赫やく日の色に覚めた王朝の人は、老の色を香の色に求めたのであつた。それは又世の塵を去つた僧侶が檜扇に求めた色でもあつた。白檜扇の、ながく持ち人の焚きしめる香の移り香の自然に染めつけた香の色、それには、若人の新鮮をもとめる活動的な氣質に對して、老人の諸事につゝましく己が過ぎ

こし生涯の思出を眼前に盡して、年ふりた檜扇になつかしむ態に、老人の衣裝の却へつて若やぎ美々しいのに比して、甚だしく對蹠的なものが見られる。この對蹠を一層嚴にする爲に、ますく香染の扇は强く年ふりた姿をあらはさねばならない。こゝに色を以て深く染めつけたそれが生れてくる事になつた。この樣にしてまでも、尙ほ香ノ扇は持ちつゞけられる。

朽ちる齡を香ノ檜扇になかめる心が調和の心であれば、老の姿を美裝につゝむ心は對照の心である。橫目扇が老人にもたれる事は卽ちこの對照の心理である。主に蓬萊の圖柄に型どつた繪、松に鶴の吉祥畫、この樣な圖樣をもつた橫目の扇は實は童子の扇であつた。しかもそれが、僅かに用材を異にするのみで老人の手にせられる事は、何としても五旬以後の吾はと思ふ人でなければ持つまいと云はれてゐやうとも、兎も角もそれは再び童子の姿にかへらうとする心である。あらたなる人生への出發がこゝにある。それを支へるものは卽ち吾はといふつよい自己意識であつた。平安の時代に於けるかういつた自己意識の存在は、己が一門の爲に吾が身の爲に高位をのぞみ高官をのぞんだ中にもみとめられねばならない。この吾はといふ心は己を人よりも目立たせようとする心持である。衣裝に、持ち物に、きはだつて華飾をほどこすことが行はれたのは、最も手取り早いこの心持の表し方である。王朝の時代に美麗が行きわたつた事は、かうした心情に負ふ所が多い。長保といへば、道長榮華の寬弘よりも數年早い頃であるが、既に金銀薄泥の使用の禁止が再度扇に及んでゐたのである。「扇は纖かに是れ夏冬二時の玩であつて、累世の珍となす事は出來ない。かつて嚴に科條を立てゝ禁じたのであるが、近來又虛華の風が行はれる。こんなはかないものに多く薄泥を用ひる人及び畫工等は違犯のまゝに罪を論ずべし」とする禁制が行はれてゐるのである。しかし、この頃の常として、禁制も權力には屈せざるを得ない。艷麗の華は次の寬弘・長和・寬仁と咲きほこるのであつた。

扇のはなやかさは思ひ見るだにおろかである。

四

華美艶麗は女性の世界である。こゝに美は纖細を極め優雅を極めた。檜扇は女性の持代(モチシロ)として初めて、その美に全いものを見出したのであつた。女性は亦檜扇に於てこそ、女性らしさを見出したと云ふ事が出來る。

美しく金銀薄泥によそほはれ、泥繪の色どりにその人の心根を偲ばせるこの檜扇に面(オモテ)をかくした女房のあでやかさに充分に心を動された公卿・殿上人(テンジョウビト)等の行き交ふさまを、秘そかに檜扇の板の隙目から垣間(カイマ)見て、後宮の月日を己がじし男の品さだめに打興じた事は、男の世界の例の「雨夜の品定め」と同斷である。心をゆるした思ひ人に手馴れの檜扇の端(ワ)を欠いて文を書き歌をよみ送る習はしは、この時代の人達の生活のうるはしい一場面でさへあつたのである。

女らしいもの、それがこの頃のもとめる至高なものであつた。男の側に於てすら、「女の様な」といふ事が、この上もない誇であつた。しかし、男は美鬚を生ふし何とはなしに角々しさを持つてゐるのは、如何ともしがたいその本性である。童兒(ワラワ)の世界にこそ男の中の女らしさは全いといはねばならぬ。童兒のもつ横目の扇が、「女房扇の如し」と「玉海」に記るされてゐるのは當然である。それに美はしい吉祥圖様の畫かれてゐるのをつねとした事は、幼い人達の前途の多幸を祝福する心である。この優雅さこそ、通じて人々にもとめられた女らしいものゝ實態である。現し身に女てふを荷負ふ女の世界では、一層女らしさに徹せねばならない。思ひ〳〵にその心根(ココロネ)を裝ほひに表はして、女は女らしさを競はねばならない。面(オモ)かくして人の心を牽くこの檜扇、思ふ人に書き送らねばならぬ。美しい檜扇を披いたまゝの姿で柳筥などに載せて奉る風は、その裝の美さを示さん下情(シタゴコロ)で

さへあると見られはしまいか。自らをつよく表はす爲に無上の意裝が、至極の文様が施され、めぐらされてくるのは人情である。男性の間では、可成りの規範があつたと見られる檜扇も、女性の側では、この限りに於て自由である。

勿論、皇太后宮・皇后宮の御檜扇の赤色にそめなされてゐた記錄は傳はつてゐる。丁度、それは天皇・皇太子の御扇の赤色であるのと同一で、これ亦日の色をこゝに寫し表はしたと見ねばならない。女房檜扇にとつて、規範らしいものがあるとするならば、それは加茂の齋院の檜扇と、五節の舞姫の檜扇位なものである。齋院のは、平安朝の後半、院政の頃には、御禊の日に用ひられる冬扇は內殿上人が、祭の日のは藏人所が調進する水扇といはれる檜扇であつた。それは、大治・天承の頃には、ほとんど例外なしに守られた規範であつたらしい。年ごとの五節の舞姫の扇に至つては、本來天津乙女の姿をうつすこの舞であるために、善美のつくされた事はいふまでもない。晴やかに人目を牽かうとする五節女房檜扇は、丑日は赤色の扇、寅の日は青色、辰日青摺の扇と傳へられる。そのそれ〴〵の日、唐衣の色と同じこの色檜扇は、かなり古くより定められてゐたものかもしれない。それは描かれない色檜扇であつたのか、吉祥圖の描かれたものであつたのか。唯、五節の色檜扇をつたへる「長秋記」は又皇后宮大夫より送つた舞姫の裝束の中に桐竹泥繪扇一枚のあつた事を傳へてゐる。

しかし、かういふ二三の檜扇は、たゞ儀式めいた折々の持料にすぎない。日々の靜かな宮廷の生活には、もつと自由な心ごゝろの檜扇がもちあつかはれねばならぬ。

寬弘を頂として、その榮を極めた藤原の時代には、この風潮は極度に達してゐた。その一つ〳〵に持人の心がしのばれた。紫式部の「源氏物語」にかういふ一段がある。

——二月の二十日あまり南殿に櫻の御宴があつた。宴はて、光源氏は醉心地でふと弘

徽殿の細殿にお立ち寄りになつて三の戸口から中を御覧になると、一人の女房が「朧月夜に似るものぞなき」と誦じつゝ歩いてくる。源氏はつとその袖をお控へになつておものがたりあるうちに夜があけて行く。もう人々が起き出して、足繁く上の御局へ行き交ふけはひなので是非なく後のしるしのためにと、扇ばかりをお取りかはしになつた。翌る日は後宴の御事があつた。源氏は今朝あかつきにわかれ來た朧月夜の君——この人故に後に須磨明石の憂き月をながめねばならなかつた源氏ではあつたが、この人をわすれがたく、かのしるしの扇を取り出して御覧になると、

櫻の三重がさねにて、濃きかたに霞める月をかきて、水にうつしたる心ばえ、目なれたれど、ゆえなつかしうもて馴らしてあつた。彼の君が「草の原をば」と詠まれた面影がしきりに思ひだされ給ふまゝに

世にしらぬこゝちこそすれ有明の
　月のゆくえを空にまがえて

と扇にお書きつけになつて、お置きになつた——

と、わざとにはあらず、しかも己の姿を人の心につたへるみやびやかさが滲みでゝゐるこの花宴の巻は、今も尚ほ、王朝の世に我を忘れしめる一條である。

この一條に讀まれる「みへがさね」、よく物語に、「五重の扇をひろげたらんやうな髪」といはれるいつへがさねの檜扇は、後の世に、さかしらだつた勘物を付加へられるむつかしい檜扇となりおほせるのであるが、「いつへはもとなどにくげ」な姿づきの故に、いたく清少納言の俊敏な批判を罷つたそのおなじかさね扇のたぐひである。人々の撰擇は、この様に一人〳〵の位の高さ、職の高下できびしいおきてをうけることなく、思ふまゝに加へる事が出來たのである。

いつへであらうと、みへであらうと、檜扇のあらんかざりは女房の必需の品であり、花もみぢ、四季折り〳〵の畫が、蓬萊や松鶴の吉祥圖とともに、金銀泥箔のきらびやかな裝の上にものせられた。それは後世の檜扇のその様にもてあつかふも大儀なほど、大きく無様な姿ではなかつた。一尺を目あてにその長さを採られ、紫に白に擇り染められた絲が、蝶鳥の要に照り映えた可憐な檜扇

なのであつた。

しかし、世のすゝみ行くまゝに、王朝の花もやがて散りゆく頃ともなれば、この女房檜扇にもその裝の上に一つの新氣運がうごいたとみねばならなくなつてくる。尤も、治承二年高倉天皇の中宮の御産の御後に臺盤所（ダイバンドコロ）の女房達のすべてが、胡粉で地塗をした、銀泥の松鶴の畫、要までも白銅といふ白づくめの檜扇を持つたのは、例の汚穢（ワエ）をいみきらつた白裝束の爲であり、恐らくは古い慣例の示すがまゝの振舞であらう。けれども、「長秋記」の傳ふる一條は、之、即ちこゝにいふ新氣運でなければならぬ。——天承元年加茂祭の際の白銀水扇とか、又其の翌々年長承二年四月十八日齋院の東河ノ祓のあつた時

三十五枚扇銀表骨云云

の記事が殘されてゐる。いふ迄もなく、この三十五枚扇は薄板三十五枚を綴ぢ合はせた檜扇である事は、この頃の常として齋院の御扇が冬扇であつた事か

ら、疑ふ餘地もない。その檜扇の表骨（オモテボネ）、即ち兩方の親骨が銀製である事を告るのであり、やがてこの類の金屬製の檜扇は、後に云はれる鍵表骨扇（カガシオモテボネアフギ）とか水入扇とかの萠であらねばならぬ。費（ワヒ）への上でこそ、この檜扇は嵩高い品物に違ひはないが、もはや昔日の優雅な檜板の檜扇に比すべきものをもたなかつたであらう。銀表骨の檜扇又銀のしかも彫刻を施した表骨、これらはたゞ一例にすぎないが、他にも同樣な趣興に過ぎた檜扇はあつた事であらう。かういふ扇のたぐひには、もはや本來の檜扇そのものからみれば如何にもして新たならうとするたくらみがある。このたくらみが、かへつて後の世の規範となり了せてはゐるが、實は、檜扇の素直に伸び行く枝に加へられた人手（ヒトデ）の撓（タワシ）でしかない。

撓みまげられる枝と共に、やはり自然にのびゆく枝も亦一方になければならぬ。この枝にやがて咲き出でた檜扇こそは、即ち通じての女房檜扇に名づけられた細面（ホソオモテ）の檜扇であらねばならぬ。藤原定家は自らの日記「明月記」に

教雅少將以ニ使者一尋ニ別當一。五帖女房扇二枚可ニ調送一ニ由消息何樣物哉。答云。扇近代檜扇細面ト云塗雲母（シタニカキノ）畫レ繪遠山野之體、野筋等五六分許、人形金銅鈸目。以ニ村緒若青白一糸ニ貫レ之。絲末結垂物也者

と、細面の檜扇の詳細を傳へてゐる。しかし、この記錄は嘉祿元年十月十五日の事である。鎌倉の時代になつてからの事である。が、實は細面（ホソオモテ）の檜扇は、今すこしふるく平安の時代のごく末期、仁安四年の「兵範記」の皇太后宮日吉社行啓の記事の中に現はれてくる。同日の「愚昧記」の記事と合せ考へると、勅使の兼光が、紅薄樣を敷いた柳筥に、披きながら置かれた赤色細面の、赤糸で貫ぢた繪のかゝれてゐない檜扇を持參したと見られる。仁安年間のこの赤色細面の檜扇は、定家のいふ細面檜扇と同じい形式の檜扇でなければならぬ。細面といふは、畫樣や色合の事ではない。それは檜扇の形體の事である。彼の細殿などといふと同じやうに、檜扇のもつ清楚な、やさしさ、それの極めて強調せられた、

薄板の幅の細やかな女房檜扇の形姿に呼ばれた言葉である。——ずつと後世、「類聚名物考」の著者山岡俊明が

今の世には模樣なき素木を檜扇といひて貫緒もなし、こゝに見ゆるさまなるは今は袒扇といふ、箔をおし彩色繪をかき、つま紅などにして、とぢ糸のさきを長さ四五尺ばかりいろ〳〵の糸にてすかりの樣にしてたれたる。これをばかさすことなり、なにによりてあこめ扇といへるにや未レ考、この記に細面とある、もし明面の誤にて、それをあかめとも訓すべきか、外にしるしとすべき事未レ見。

と、いぶかしがつたこの細面の檜扇こそは、藤原の世を過ぎ、院政の時代をすぎて、やがて武士の時代に入らうとする平氏擅權の頃、天下に行はれた式正な（シキシヨウ）女房檜扇それ自身であつたのである。そして、其後室町の頃まで、この細面の名は忘れられてはゐない。

千々に亂れ咲く秋草のそれの樣に、平安朝の檜扇は秀麗を競ひ嫋々の風情を示してゐた。併し、さうした千姿萬態の中にも、おのづからなる規範がそれにまもられてゐたと見られる。一つには男をんなのけじめによる差別であり、又一つには檜扇自らの構成の上に於けるそれである。あれほど迄に、思ふまゝに、持ち人の自由好惡を寫し出した女性の扇でさへも、それだけは守り通されたいきたりが構成の上にあつたのである。——「源氏物語」の例の「さくらのみへがさねね」、「枕草子」の「五葉の枝につけたるみへがさねの扇」、かういふかさねこそは檜扇構成の基礎にふれるものでありはしまいか。さくらのみへかさねは「目なれたれど故なつかしく」とのべられて、それが女房檜扇に通じての風情であつた事をつげてゐるし、「いつべはもとなどにくげ」な姿であるといはれる樣に、三重も五重も女房常用の檜扇の姿であつたのである。否、重ね檜扇はひとり女房檜扇の姿のみではない。「山槐記」の傳へる處によれば保元元年七月一日左大將の相撲を饗する際の引出物に一重扇を賜ふ事があるのであつて、それは男扇にも、このことばのいはれた事をかたつてゐる。卽ち、これらのかさねの檜扇こそは、平安朝を通じての、裝ひをのぞいた檜扇の通態であつたといはねばならない。そして、奇しくもこの保元元年の記錄を最後に、も早や重ね扇の名は記錄にあとをたつてゐる。王朝の時代に、種々の物語にいとはしいまでにのべられたこの重ね扇も、極く目馴れた人々の世を去りゆくに從つて、大いなる時代の流轉とともに、忘却の彼方に消えうせて、それがもし、むつかしい特異なものであつたのなら何人かに說きしるされる事もあらうに、知れわたつた平易な姿であつたが爲にかへつてさうした書記の事もなく、ふつつりとあとを打ち絕つたのであつた。それでこそ一時代、時が經てしまへば、もう如何ともしがたい不可解な難句として、物語を樂しむほどの人達にも、さま〴〵な註解を必要とするほどのものとなりおほせたのであつた。先づ、それは鎌倉時代、永仁

二年よりは古いといはれる源光行の手になつた「水原紫明抄」にはじまるといへるであらう。「源氏物語」にあらはれた、勘物を要するほどの言葉がときあかされてゐるこの抄には、花宴の註の中に、

サクラノ三重カサネ　檜扇ノ兩ノ端三枚ツヽヲツヽメリ、櫻ノウスヤウ面シロク裏スワウニヤ　コキカタハ紫ニテコク色トリタルカタ也　枕草帋ニモ三重カサネ五重トアリ

と、しるされてゐる。それが吉野朝時代康曆年間に成された四辻善成の「河海抄」には、檜扇の兩端三枚づゝを櫻の薄様でつゝみ、糸にてとぢて、糸のあまりをあわびむすびとするのである、（後の檜扇の親骨の心である）と、一層こまかく註されてゐる。

たゞ、後に「類聚名物考」は、

かさねに三重五重のわかち有り、この事さだかには知れねども、今公家にて用ゐらるゝ重ね扇とは、たとへば三重かさねは檜扇の兩端を三本づゝかさねてそれを下の方三四寸ほどを薄様紙にてつゝむなり、此紙も又かさね有り、五重かさねは五本骨をかさねてつゝむなり、様式有るを見て知るべし、古へさま必しもかく有りけりとも聞えず、是は近世閨推の製作なるべし、此事はことの外むつかしく事長ければ別にしるしおきぬ。

と、二抄の註を受け入れてはゐない。この書一つをのぞいては、「紫明抄」・「河海抄」の註は「仙源抄」・「最秘抄」・「花鳥餘情」等と、恰も源氏註解の師承相傳の跡を告げるかの様に、總ての註解書の採る處となつて、何の疑もいだかれずに、今日にまで及んでゐる。

この抄物類の説く處、既に抄物述作の當時、重ね扇の姿は知るによしないものとなつてゐた事をつげるのであり、それは僅かに五・六十年をさかのぼる鎌倉初期に著はされた藤原定家の「源氏物語奥入」に何の註も加へられてゐない事とは格段の相違である。定家の生れる六年前の保元元年にはあきらかに一重扇といふものがしられてゐたのであるから、定家が「奥入」を書いた頃には、まだ重ね扇の姿はよく知られてゐたので註する要もなかつたと思つてよいであらう。

さて、この「紫明抄」や「河海抄」等の註のとほりに重ね扇の姿を考へてみると今までには氣付かれなかつた奇妙な矛盾があらはれてくる。檜扇の薄板の數を假りに一定のものとすると、三重がさねは兩端で都合六枚の薄板が絨ぢ合はさるのに反して、五重がさねの扇になると都合十枚も絨ぢ合せられて、この扇を開けた場合などは、三重よりはその開いた扇形の大きさのはるかに狹い檜扇となつてしまふ。それは、丈なす豐かな黒髮を幅廣やかに垂れ下げた女房のその有樣の美しさを形容して「五重の扇をひろげたらん樣な」とくさ〴〵の物語などにのべられたあの姿とは似ても似つかぬ有樣となりはてる。却つて一重の扇こそ、それにはこよなき形容詞であるのではなからうか。五重の扇が形容詞に用ひられてゐるのは、必ず、この扇が髮の幅廣き姿に似かよふものでなければならない。幅廣き檜扇こそ五重の扇でなければならぬ。「枕草子」に五重の扇は手元が厚くてにくげであるといふのは薄板の數が三重がさねよりは多い事をつげてゐるのでなければならぬ。

先にのべた種々の註書は、すべて王朝の物語のなされた當時を遙けくもへだたつた後の世に作り傳へられた考案でしかないのである。檜扇を手づから造る人々とは、かけはなれて、學者の机上の論といふべきである。

ところが、一方、工人の間には、綿々として傳へられた無言の作法が存してゐた。それは何時の代から傳へられたか知るよしもないけれど、江戸時代の初期から禁裡御用として二百年餘りも今日迄この業(ワザ)一つにいのちを托して來た私の家には、少くとも別の傳へが存してゐる。武家時代封建の社會の特色とまでになつてゐた口傳として他の九種の作法とともに、檜扇の薄板編序に就いて一傳がのこされてゐる。今日ではもうそれが一つの定めとして、何の理由ものべられずに存してゐるに過ぎない。昔は堅く口止めせられ秘められてゐたけれど、今は口傳を口傳として秘めねばならぬ時代ではない。知れる限り、傳へられる限

りを廣く傳へ殘し置くべき時である。――その口傳はかうである。檜扇を作る場合には、薄板八枚を一つの編序の單位として增減せねばならないといふ事である。今では、たゞこれだけの事がのこされてゐるに過ぎない。しかし、この口傳は少くとも德川の初には存してゐたに違ひない。家の職系が室町時代の城殿の扇折りを承け繼いでゐるので、恐らくは足利の城殿には、この口傳はあつたと見ねばならぬ。工人の職系といふものは、忽焉として興るものではない。その匠職の祖は、又その祖にさかのぼつて、連々としてその始祖につらなり條々として後世ながく續けられるものである。一つの業の上の作法は、その初にこそ、それ相當の時代の理由を負はされてゐるけれど、傳へられるまゝに理由を失して、たゞ作法そのものばかりが「かうするものである」として、次々に時代〳〵を超越して傳へられるものである。それが口傳である。かう考へると、おそらく檜扇編序の口傳も、遙かに王朝の檜扇編序につゞかねばならぬ。王朝の世、八枚の檜扇を考へる事が自らに浮び上つて來る事であらう。その八枚の薄板から成り立つた檜扇、それこそは一重の檜扇でないであらうか。三重がさねの檜扇は、從つて板數二十四枚の檜扇であり、五重がさねは同じく四十枚の檜扇でなければならぬ。三重がさねの檜扇に比ぶれば、五重は成る程にくげなほど隨分と手元の厚肥えた檜扇である、しかも、隨分と開いた幅の廣く豐かな檜扇である。

かういふ、一重の檜扇をかさねて行くといふ樣な重襲の思想は、たゞ單に扇のみにあらはれた思想ではなかつた。實は、王朝の思想の中に根深く育てられてゐた思想であつた。彼の色調にあらはれた重ねの色目にしても、將又、いくへにも衣を覆ひかさねた五衣にしても、すべてこのやうにしげく重ねて行く思想は王朝文化の中に目立つたものとしてながめられる。それは富み豐かな人の權威を表現する一つの手段であつたのである。華美を競ふ心と似通つたこの重襲の思想、それが檜扇に現はれたのに過ぎない。彼の三重がさねの檜扇にして

も、いつへの檜扇にしても。

さて、この三重、五重の檜扇のそれ〴〵の板數の二十四枚、四十枚といふ中にふくまれた四といふ言葉は、この時代には忌まれねばならない數であり、言葉であつた。ときはに榮える生命を求願するその頃の人達、吉祥圖を目の觸れる限りに畫き、吉祥語を口に耳にたえる事なく談じ聞かねばならなかつた當代の貴紳にとつて、人の代(ヨ)のをわりを告げる不吉なシはことさらに退け遠ざけねばならぬ音であつた。二十四枚が或は二十三枚となり、或は二十五枚となり、四十枚が三十九枚・三十八枚と變する事はどうしてもさけがたい自然の勢であつた。そして、この様なしきたりを、知らず〳〵にうけついだ後の世からは、こゝにはからずも身分の高下がこの板數のそれ〴〵に相當るかの様な觀を呈するに至つたと考へられる。後世の鎌倉・室町の時代ともなれば、公卿は廿五橋、殿上人は廿三橋であるとか、公卿は三十枚、殿上人は廿五枚であるとかのべて

ゐる。瀧口(タキグチ)出仕の輩は十六枚といふのは永仁の頃の事である。これらは多く王朝の傳統を負うたものであらう。そして、これらは、殆んどすべて身分の高い男の扇が三重の扇であり、ひくい人達は二重や一重の扇であつた事をつげてゐるのである。それにひきかへて、時には「長秋記」大治四年正月八日の條に記るされた様に、

皇后宮進扇二枚、入內所可遣料也、各三重有銀掘物表骨

と、女性の扇に三重の扇をつたへてゐるが、多くは五重の扇が持たれたものであつた事は、當時の日記などにしるされた檜扇の枚數をみれば明らかである。彼の雄勁な文體で、「源氏物語」と好對照をなしてゐる「枕草子」の作者、清少納言の如き男性的な心の持主は、扇にすらも女性的な五重を排して、男のもちものゝ三重をもとめたのであつた。又、女らしうならうとした王朝の男性も、やはり女性の繁くあでやかな五重扇をさけて三重をもちものとした。童(ワラワ)の横目扇

でさへも三重であつた。同じく三重の扇の中でも、やはり二十三枚よりは二十五枚を、その板の繁きが故に、上卿の持料と撰んだのであらう。二重、一重の簡素なものは、身のひくき人々の世界のものであつたと思つていゝのではなからうか。

私は、今、王朝の檜扇を八枚―八橋―を以てその編序の單位としたであらう事をのべた。しかしながら、ひとり八橋のみが一重扇であつたのではなく、縦令、一橋はいふまでもないが、二橋・三橋にしても扇として小さきに過ぎ、四橋は忌まねばならなくとも、恐らくは、五橋から八橋までの一重の扇はあつたであらう。女房扇に三十五橋のものがのべられてゐるのは、七橋の一重を考へるよすがともなるであらうし、後に「宣胤卿記」の述べた三十枚の公卿の扇は六橋の一重をこばみえないであらう。この様に、それほどには嚴格に定められてはゐなかつた檜扇編序の板數（イタカズ）も、八神殿にいつきまつる神達に、八百萬神達に八平手を拍つてぬかづく國民には八の數を好もしきものと自（ミ）ら撰り定められて來る様になつたと思へばわるいであらうか。九橋の九は苦に通じるが故に、四と共に又忌まねばならぬ音であるので、我國では滿ちたりた數（カズ）として八を好もしいものと撰んだのであらう。簡素な一重の扇の中ですらも、しかもなほ充滿具足した八橋を一重の扇の常形と撰り定めたと見られはしまいか。人達の中に八をえりこのむ風習は、不思議と持ち傳へられてゐるのである。

「源氏物語」花宴の「さくらの三重がさね」は、從つて「二十三枚又は二十五枚の女房檜扇、それの表は胡粉で、裏は蘇芳で、丁度櫻重（サクラガサ）ねの色目にそめられて、その裏の方に月影が畫いてある。それはまるで水にうつゝた朧月そのまゝのすがた」、と見られた。この三重の檜扇が持人の朧月夜の君をおもはせて懐しいものとしたのであつた。諸抄のいふ櫻薄様で檜扇の兩方を三枚づゝ包んだもので

はなかつた。勿論、檜扇を薄様で包む場合は無いわけではない。檜扇を賜ふ場合に、贈る場合に、すつかりと檜扇を薄様（ウスヤウ）で包む事は、この王朝の時代では常の事であつた。この包（ツヽミ）となつた薄様と、檜扇の三重と、それが混亂した結果、あの様な註釋があらはれ、ながく、その事實を包んでしまつたに過ぎない。

老ひ人のも、わらはのも、亦男扇にしても、女房扇にしても、檜扇は、決してこの重（カサネ）のさだめをのがれる事は出來なかつた。王朝のかうした重ね扇が、すつかりとわすれられた後の時代でさへも、かくあるべきものとして男扇・女房扇の板數は昔ながらに遵られて來たのである。

六

冬の心を、あたゝかさに求めた王朝の人は、檜扇に、殊に重ねの檜扇に、それを表はし、それを得た。冬をあたゝかさに求める心は、夏を涼しさに詠（ナガ）める心である。骨の上に濃ろやかな紙が張られてゐるあの夏扇の姿は、唯それだけで充分に冬の扇と異なつたすゞしさをあたへる。その骨はあくまでも冬扇のそれの様であつてはならない。

一つには、それは檜扇の板の如くに幅廣く厚肥えた姿ではなしに、細々としてどこまでも輕るやかなすゞしさを求める。又一つには、檜扇のそれの如くにかさねられた板の繁き姿であつてはならぬ。重ね扇は言ふ迄もなく、一重の檜扇ですら、なほそのもつあたゝかい觸感は棄て去るべくもない。繁き姿を避けようとして、夏扇は出來るだけその骨の數を減じなければならぬ。さうして、たどりついた骨の數こそは、五つであつた。一本・二本・三本の骨數で扇のなり立たゝぬ事は、四本の忌まれねばならなかつた事と共に、檜扇の場合と同然である。數骨の夏扇は世に行はれたに違ひはないが、中でも、五本骨の夏扇

こそは、一重の檜扇のその中でも最も板數の少い五橋の檜扇と丁度同じ姿である。夏扇は、やがて、一重の扇として育てられねばならなかつた。男女の夏の衣に一重のもてあつかはれると同じ様に夏扇は一重である。

それは一重の衣服と同じく裏の付けられた姿ではない。骨を露はに張られた姿は、裏なしの衣の形である。しかし夏の衣のひろやかな様に、扇の紙はあたふかぎりひろやかにあらねばならぬ。定つた漉き枠で漉かれる紙から、出來るだけ大きく扇面が作られねばならぬ。そして、それは、か細い骨の上に廣々と張り付けられる。——折り疊んだ幅つまり折幅が從つて二寸以上にも及んだ事は、けつして稀有の事ではなかつたであらう。

夏扇に冷々とした心を求める事は、やがて紙すらも尙あつしとして、透き通る絹・羅を用ひた事を、異例であるといふよりは、かへつて夏の心に徹したものとして、稱讃せねばならぬ事である。しかも、それは、驚嘆すべき技倆の存

315480

在すら必要とする。しかし願れば、古くこの種の夏扇は調ぜられたものであり、天祿の頃の扇合せには、既にその姿を表はしてゐる。

輕羅に涼しさを求めた心は、實は又透き扇を生み出した心に通じる。平安の世も、やがて終らうとする治承三年、切透扇とか透扇とか云はれる夏扇の一つが、夏への旅立を指し示める加茂の祭の歸さに用ひられてゐた事を、藤原忠親は書き殘してゐる。江戸の時代に、故實家の壺井義知が杉扇とあやまり、橘嘉樹が「彩色しろくしてスキトホル」冬扇をさへ空想したこの透扇は、實は、骨に切透しをもつた夏扇であつたのである。

細々とした夏扇の骨には、切透しを彫りぬく事は出來ない。必ずや檜扇の板の如くに幅廣い平骨でなければならぬ。天祿の扇合せにあらはれた初期の平骨は、丁度、再びこの頃あらはれてゐる。太政大臣藤原師長が冬扇の如き扇骨、それに薄香紙の扇面の夏扇を提へて、內ノ御作文に臨んだ事が傳へられてゐる。

この事は、仁平元年に骨の數の多い夏扇の用ひられた事を容れ得る事である。純な夏扇の心のやがて忘れられゆく事を示してゐる。夏扇のもつ簡素さではなしに、重厚さ、繁雑さ、つまり曾ての夏の心とは反對な方向に世の感性が動いてゐた事を語つてゐる。そして、その繁雑さを益々進めて行つて彫金技術の影響の下に遂に透扇にたどりついた。一たび透扇が見出されると、それは繁雑さの生み出した扇ではあつたけれど、透し彫りの故に、又かへつて夏の心を抱き得たのであつた。曾ては絹羅に夏を得た王朝は、その終りの頃、切透をする事によつて、又再び夏を見たのである。曾ては、素直な細骨に、夏の心を得た時代が、やがては技巧の末に巧（ワザ）を托して透扇を産む時代となる。その時代は彼の檜扇に、やがて銀（シロガネ）の板の用ひられる時代であつた。こゝにも彼れ此れ相通じる時代の精神がながめられる。

しかし、世をあげて透扇こそ夏扇とするといふ事ではなかつた。それは或る

きはだつた行事の中での事であつたであらう。一方では、變る事なく細々とした骨に、夏扇のまことの姿を見た人達もあつたのである。そして、それが尋常の世の姿である。

七

この様に、夏扇が、骨を細められ、色どられ、透し彫りされたり、輕羅を張られたり、勿論夏扇の心を掬みながらの事ではあつたけれども、かうしたさまざまな技巧をそれになされたといふのも、實は、彼の檜扇が式正（シキショウ）な器と見られてゐたのとは反對に、手輕るな日常の器であつたが爲である。それには檜扇の場合の様に、行事と結ばれ身分と結ばれたおきての様なものはなかつた。たゞ加茂祭の歸日の夏扇が院より進められるといふ定が天承元年よりはじまつた事などが行事と結ばれた規則の様なものにすぎない。

「夏は蝙蝠扇（カハホリ）」といふ事は、最初から暑氣を凌ぐための用意であり、直衣の様な平服にさへ持たれるといふ事は、これが實用の品物である事を示してゐる。實用的である爲に、反へつて夏扇は人々に親しい器であり、とりわけ、その扇の紙のもつ感覺は、平安朝の人々の趣向に適したものであつたのである。從つて、式正な檜扇でさへも規範にのつとりながら、あたふ限り持ち人の心を表はし得たのであるから、目立つた規範を一つもともなはないこの夏扇は、充分に人々の好尚を表はし得たのであつた。千態萬姿の夏扇が、身分の高下をはなれ、榮枯を絶してもてなされてゐた。崇徳天皇の頃、藤原爲業が文徳天皇より後一條天皇の朝まで百數十年の世のさまを雲林院に語らはせた世繼は

黒柿の骨の九つあるに黄なる紙はりたる扇さしかくして

けしきだち笑つた。身いやしき世繼の翁にも持たれたこの扇が、同じ世繼の語る「大鏡」の中で、又

殿上人扇どもしてまゐらするに、こと人々は骨に蒔繪をし、或は、しろがねこがね沈紫檀の骨になむ、筋をいれ、ほりものをし、えもいはぬ紙どもに、人のなべてしらぬ歌や詩や、又六十餘國の歌枕に名あがりたる處などをかきつゝ、人々參らするに、例のこの殿（行成）は、骨の漆ばかりを、をかしげにぬりて、黄なるから紙のした繪ほのかにをかしきほどなるに、おもての方には樂府をうるはしう眞にかき、裏には御筆とゞめて草にめでたくかきて、奉りたまへりければ、うちかへし〳〵、みかど御覽じて、御手箱にいれさせ給ひて、いみじき御寶とおぼしめしたりけれは、こと扇どもは、たゞ御覽じ興ずるばかりにて、やみ侍りにけり。

とのべられて、藤原の時代に、宮廷の中では種々の技巧が弄されてゐた事をかたつてゐる。紫式部がその日記に

扇どものをかしきをそのころは人々もたり

といふは寛弘の五年八月の事である。まことに、夏扇への關心は、この頃その盛を極めたと見える。

寛和二年六月十八日、清少納言が

細塗骨など骨はかはれど、たゞ赤き紙をおしなべてうち使ひ給へるは、なでしこのいみじう咲きたるにぞいとよく似たる

とのべてゐる赤紙の扇、卽ち赤扇は、日記などの傳へる處を見るも、亦極めて人々のもてはやした夏扇の色であつたのである。それは、紙の赤きを目的としたのであつて、紙の張られる骨への關心ではなかつた。しかし、「細塗骨などは骨はかはれど」と骨へ注意を示してゐる清少納言は、實に、「あをいろはあかき、むらさきはみどり」と強く骨と紙との色調をかんがへてゐる。それはかの色目を云々するほどの王朝の社會に於ては、寧ろ當然な事でなければならない。けれども、當時の多くの人々には、色調を思ひ考へる事よりもまさつて、自らの力ある姿を先づ第一に誇示せねばならなかつたのであつた。その爲には「更にまだ見ぬ」ほどの骨をすら作りなした。黑塗骨、蒔繪骨、色骨、金銀、唐木、

竹とその色にその材に奇を競つてゐる。

「いみじき」骨には「おぼろげの紙はるまじ」とする態度はやがて扇の地紙への選擇の嚴しかつた事をつげてゐる。白紙・色紙は云ふまでもない、唐紙の白きも色あるも。

これらの扇面には、檜扇の場合と同じ樣に、寧ろ尙ほ一層檜扇よりも親しまれた爲に、もつと自由に、そして氣樂な氣分で、しかし綺羅の限りをつくして裝はれてゐた。かの長保元年の禁令は夏扇にも亦同じく云はれた處である。夏扇の裝飾が金銀泥薄のたゝずまひに依つた事は云ふまでもない。流黑しもあつたであらう。吉祥圖——しかし、それは蓬萊の文樣と云ふよりは松に鶴の自然のすがたとしてあらはされた場合が多かつたであらうが、それよりも、もつと自然な世のすがた、目にふれる詠めこそは夏扇のこよなき畫題である。市にあきなふ賤女も、旅行くあはれも、「竹に雪」のおもしろく置けるあたり、「ほとゝ

ぎすの卵の花くひていく」さま――花鳥風月は無上の畫材を提供してくれる。泥繪・から繪、恐らくは白描繪のあつた事が思はれる。行成の奉つた扇に「下繪ほのかに」あるのはそれを指すのでもあらうか。

人々の關心はこれらの扇面畫に集中されるそこに扇面畫のみの多様性と發達とがあつた。それは、やがて、扇面のみの獨立性をみとめる。「長秋記」に

（保延元年五月十七日己丑晴）女院近習女房殿上人左右各十餘人、調扇紙可合之由日來云々、今日有其事

と見えてゐるこの扇面合せは、卽ちそのあらはれである。しかし扇面にはひたすら畫のみが榮えたのではない。それは、かへつて和哥などの料紙として役立つてゐた。或は羇旅のはなむけに、或は戀のうつたへに、贈りこたへる和哥のものせられた事はかず限りもない。併し吹く秋風と共にこれらの夏扇は打ちすてられる。

月に昔を思ひ出でゝ、むしばみたるかはほりとりいでて、もと見し駒にといひて、立てる門あわれなり

と「枕草子」の作者の如きは、いにしへ年の思出にふける心を、こよなくなつかしきものゝ一つとしてゐる。手馴れの人の移香（ウツリガ）を深くたゞよはせながら、うつともなく去つてしまつた人の形見の扇に、戀のはかなさをつく〴〵となげいた王朝のあてびとは、漢の班女が身によそへられて、とりては見、見てはなげきのたねとして、扇をしも筐底深く若き日の思出に秘めた事であらう。數多の扇がかうして秘められ、やがてその主の雲隱れとともに、あるは煙と化しおほし、あるは後の緣（エニシ）の人の手に、彌勒菩薩出世の世までも傳へ殘さんと一卷の聖經とともなつて土に入れられた事もあつたであらう。こんなにもして、王朝の扇といふ扇は亡じはてゝしまつたのでもあらうか。工人も、持ち人も、悲戀の主も、共にその名をとゞめずに、たゞ六郎冠者等の一二の人が扇繪の上手と傳へ

られるに過ぎなくて。——宋人が、その艶かさを

（熙寧末、余遊二相國寺一、見下賣二日本扇一者上、琴漆柄、以二青鵶紙一、如レ餅揲、爲二旋風扇一）淡粉畫二平遠山水一、薄傅以二五彩一、近岸爲二寒蘆衰蓼鷗鷺竚立一、景物如二八九月間一、艤二小舟一漁人、披レ蓑釣二其上一、天末隱々有二微雲飛鳥之狀一、意思深遠、筆勢精妙、中國之善レ畫者、或不レ能也、（索レ價絕高、余時貧苦、無二以買一レ之、每以爲レ恨、其後再訪二都市一、不二復有一矣、）

とかたつたこの王朝の扇の現身の姿そのまゝを今に映すのは、まことに四天王寺の扇面寫經百餘葉と嚴島神社の高倉天皇御寄進の蝙蝠扇と二者あるに過ぎない。

祕庫開鑰

一

王朝のかをりを傳へる有名な扇面寫經は、それを所藏する四天王寺が聖德太子の御建立といふ特別な御寺であるので、はやくから、同じ太子の御筆になると言ひ傳へられてゐる。しかし、その寫經の書體といひ、その料紙の粉裝と言ひ、決して、そんなに古いものではない。が、又決して鎌倉盛時のやうな武骨な時代の所產でもない。あの美はしい下繪、あの豐潤な書風、金銀のこまやかな裝ひ、それは平安の時代の香り以外の何物でもない。既に、後白河法皇が八條女院と御ともに、文治四年九月に四天王寺で、九條兼實と觀性法橋が檀越となつて出來した扇面如法經を供養せられた事がある。それは恐らく、同じ十日に兼實が「余調二進寫經具一、幷御裝束等一、以二定長一爲レ使有二御感一、此事雖レ不レ可二必然一、如法經之間、於レ事有二甘言等一、且爲レ謝二其恐一、且依レ思二結緣一也」と述べた

寫經であらう。その後早くも十六日には十基の寶輿に各々一卷づゝ捧ぜられ十種の供養が催されて、「法皇動二隨喜之叡念一、八條女院、依二結緣御志一、調二十種供養一、洛中之緇素貴賤、殆殘人少々」といはれる盛儀を見たその扇面寫經こそは、今こゝに傳はるこの國寶扇面古寫經であらう。扇面の樣な特種な料紙を用ひた寫經の如きは、それほど數あるものとも思へない。まして、善美を盡され、しかも優しさの溢れたこの扇面寫經は、四天王寺に御歸依深かつた八條女院によつてこそ寄進せられるべきものであらう。

今は硝子板にはさまれたこの扇面寫經は、明治の初年迄はまだ冊子で、春の日のつれ〴〵にみ寺の雜僧がうと〳〵となが めくらしたといふ逸話もつたへられる程に、貴重がられてはゐなかつた。多分この頃は、もつと全い形で備つてゐたものであらう。しかし、現在は四天王寺に開經の無量義經の殆んど全部と、法華經の第一卷の一部と、第六卷、第七卷の略ぼ全部が殘り、別に、西敎寺と

法隆寺とにそれ〳〵第一巻と結經の觀普賢經との一葉づゝが、又二三の個人に數葉分藏せられてゐる。これらは皆今は冊子の形をとゞめずに一葉づゝはなされてゐる。しかし、東京帝室博物館には第八巻が一冊もとの姿の扇面形の粘葉裝、卽ち、一枚の扇面を二つ折にして、それを幾つかかさねた重ね目に糊を入れて冊子とした裝禎のまゝで祕藏せられてゐる。元はすべて各巻とも粘葉帖であつたに違ひない。從つて、扇面の表にかゝれた繪は二頁置きに二頁づゝ見通しで表はれてくる事となる。寧ろ、下繪にも充分の注意をはらひ、これを見せる爲に粘葉帖にしたのであらう。帝室博物館のこの第八巻の冊子を基準にして考へると、一巻の經文が下繪のある面で終る場合は不必要であるが、下繪のない扇面、つまり扇面の裏で經文が終る場合は、更に一枚經文の書かれない扇面を折り重ねた事であらう。又開經の無量義經巻の第十六面に見られる様に、故意か不意か一面飛んで經文が寫される様な事もあるのであるが、とにかく、最

扉面冊子ノ構造

経典名	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七	一八	一九	二〇	二一	二二	二三	二四	二五	二六
法華經第一卷	表紙	返見	第一面	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七	一八	一九	二〇	二一	二二	二三	二四	二五	二六
法華經第二卷	オ	ウ	オ	ウ	オ	ウ	オ	ウ	オ	ウ	オ	ウ	オ	ウ	オ	ウ	オ	ウ	オ	ウ	オ	ウ	オ	ウ	オ	ウ	オ	ウ
法華經第三卷	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28
法華經第四卷	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28
法華經第五卷	オ	ウ	オ	ウ	オ	ウ	オ	ウ	オ	ウ	オ	ウ	オ	ウ	オ	ウ	オ	ウ	オ	ウ	オ	ウ	オ	ウ	オ	ウ	オ	ウ
法華經第六卷	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28
法華經第七卷	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28
法華經第八卷	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28
無量義經	オ	ウ	オ	ウ	オ	ウ	オ	ウ	オ	ウ	オ	ウ	オ	ウ	オ	ウ	オ	ウ	オ	ウ	オ	ウ	オ	ウ	オ	ウ	オ	ウ
觀普賢經	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28

経典名	扉面下繪	繪下	繪下	十緯刺文
		有繪下	無繪下	十緯刺文
法華經第一卷	序品第一			
法華經第二卷	譬喻品第三			
法華經第三卷	信解品第四			
法華經第四卷	五百弟子受記品第八			
法華經第五卷	授學無學人記品第九			
法華經第六卷	法師品第十			
法華經第七卷	見寶塔品第十一			
法華經第八卷	提婆達多品第十二			
無量義經	從地涌出品第十五			
觀普賢經	如來壽量品第十六			

風俗山水花鳥圖等　下繪ノ有無ニカカワラズ扇面ハスベテ金銀ノ切箔砂子野毛箔ニテ裝飾セラル

(1) 本表ハ東京帝室博物館所藏扇面法華經冊子八卷ノ結構ノ基キ作製セルモノデアル

(2) 本表中「オ」及「ウ」ト「ウ」ピ及「オ」ハアト地紙ノ扇ハ裏及表レソレソノ紙ヲ示ス

(3) ハソレソレ東京帝室博物館・法隆寺・西教寺・益田・田藤・武藤氏ノ所藏ヲ示シ ○ ハ四天王寺所藏ヲ示ス

推定扇地紙数	現存下絵扇面数	内容（右ヨリ左ヘ）
13	6	序品第一 ／ 方便品第二 ／ 裏見返 ／ 裏表紙
15	ナシ	譬喩品第三 ／ 信解品第四 ／ 裏見返 ／ 裏表紙
14	ナシ	薬草喩品第五 ／ 授記品第六 ／ 化城喩品第七 ／ 裏見返 ／ 裏表紙
12	ナシ	五百弟子受記品第八 ／ 授学無学人記品第九 ／ 法師品第十 ／ 見宝塔品第十一 ／ 裏見返 ／ 裏表紙
13	ナシ	提婆達多品第十二 ／ 勧持品第十三 ／ 安楽行品第十四 ／ 従地涌出品第十五 ／ 裏見返 ／ 裏表紙
13	13	如来寿量品第十六 ／ 分別功徳品第十七 ／ 随喜功徳品第十八 ／ 法師功徳品第十九 ／ 裏見返 ／ 裏表紙
12	12	常不軽菩薩品第二十 ／ 如来神力品第二十一 ／ 嘱累品第二十二 ／ 薬王菩薩本事品第二十三 ／ 妙音菩薩品第二十四 ／ 裏見返 ／ 裏表紙
11	11	観世音菩薩普門品第二十五 ／ 陀羅尼品第二十六 ／ 妙荘厳王本事品第二十七 ／ 普賢菩薩勧発品第二十八 ／ 裏見返 ／ 裏表紙
12	11	徳行品第一 ／ 説法品第二 ／ 十功徳品第三 ／ 十功徳品第三 ／ 裏見返 ／ 裏表紙
11	10	観普賢菩薩行法経 ／ 裏見返 ／ 裏表紙
総計	総計	
一三六枚	六三面	風俗 山水 花鳥 図 等　下絵ノ有無ニカカワラズ扇面ハスベテ金銀ノ切箔砂子野毛箔ニテ装飾セラル

紙数: 一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 合計

(1) 本表ハ東京帝室博物館所蔵扇面法華経冊子第八巻ノ粘帖ニ基キ作製セルモノデアル
(2) 本表中「オ」及ビ「ウ」トアルハ扇地紙ノソレゾレ表及裏ヲ示ス
(3) 博・法・西・益・藤・武ハソレゾレ東京帝室博物館・法隆寺・西教寺・益田・藤田・武藤氏ノ所蔵ヲ示シ○ハ四天王寺所蔵ヲ示ス

も少く見積つても、十巻完存の場合は、扇面の總計は百二十六枚を越えたであらう。

今はその略半數の六十三枚ほど現存することは、むしろ幸である。

この扇面は、單なる寫經料紙として扇面形に造られたのではない。扇骨に張れば立派な夏扇となる扇地紙（アヂガミ）である。この當時、扇地紙のみを觀賞する事がすでに行はれてゐたのは時々日記などに見える所である。かうした趣味的なものとして扇地紙がたま〳〵寫經料紙に用ひられたにすぎない。

從つて、この扇面にほどこされた裝飾は、この時代の扇の地紙のそれを示してゐる。扇に調する爲に出來上がつてゐた扇面であるので、寫しかゝれる經文とはおよそ無緣な、かへつて、扇として一般にむかへられる樣な繪がかゝれてゐるのは當然である。世にいふ樣な森羅萬象をありのまゝ草木國土悉皆成佛、引いては娑婆卽寂光土と見ようとするのが妙典の精神であるので、あの樣な樣

々な扇面の繪も、實は妙典の心を表はしてゐるのである、とする必要もない。この扇面畫の中には當時人々のもてはやした「源氏物語」や「伊勢物語」などの其他の物語繪とおぼしいものが多くふくまれてゐる。しかし、現存の扇面を通じて子供を主題とした繪の多い事と、年若き男女のかたらひの場面のふくまれてゐる事などは、經文書寫の人が意識して取りあげたものであるとする外はない。そしてこの事は、たゞこの冊子の寄進者が、大層子供の世界をなつかしんだ女性であつたであらうと思はせるに過ぎない。實に、この寫經料紙の扇面は一般の需要に沿ふための多量製産の必要から、類似した畫様がとられてゐる。そして類似の畫様はつひに珍らしい木版によつて行はれる迄に至つてゐる。例へば、第八巻の第十一面の下繪を見ると氣付く様に、その畫面は、緣端に紙をもてあつかふ二童兒の語らふ場面と、柄杓を配した泉の側で手を濯ぎながら、泉に腰をかゞめて紙を洗ふ男と語る女の場面、又扇面の左方には二人の童が、

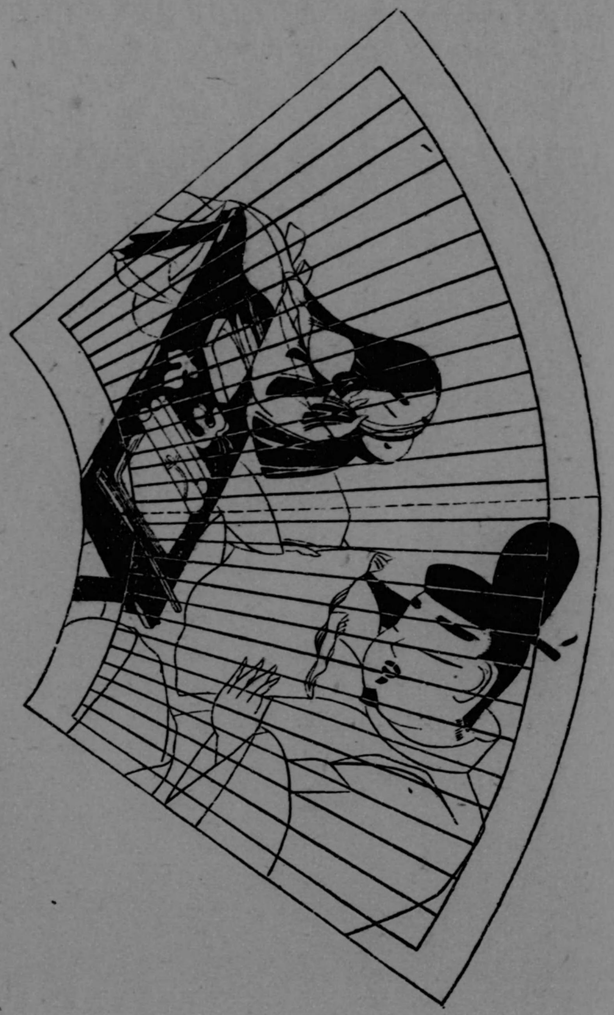
流に身の丈ほどもある大瓶を洗つてゐる場面と都合三場面から成立つてゐる。この場面の各々は、實は、それ〳〵同じ第八巻の第七面と第十七面との下繪の全部や又は一部を構成した場面である。即ち、これらの場面はそれ〳〵獨立した木版を寄木細工の様に組合せて刷つたものにほかならない。かういふ木版のあとは其他の畫面にも散見してゐる。特に觀普賢經の最初の經文書寫の面即ち第一面(全體からは第三面)は、その剝落した下繪にあきらかに木版刷りのあとを指摘する事が出來る。しかも、これらの木版の彫法は、遲滯する處なく刀はよく切れてゐる。それは素人細工ではなく專門の木版彫刻の工人の手になつたに違ひない。それは或はこの頃前後から次第に流行した摺佛の彫刻工が刻み上げたものであるかもしれぬ。

しかしながら、たとひ描線が木版刷りであつても、それは再び書き起こして、表紙の十羅刹女の圖や、又特に寄進者の好みにあふ爲に毛筆でかゝれた他

の扇面と共に、同じく描線の上から彩色がほどこされてゐる。――その繪の引目鉤鼻の面貌や様姿、草木水石のたゝずまひ、すべてこれらは一として久能寺經や隆能源氏繪卷、或は嚴島神社の平家納經の繪畫以外のものではない。平安末期の繪畫である。

はじめから、この様な繪畫のある扇面を寫經の料紙としたのである。だから一枚の扇面に一行十七字二十四行に經文を書寫する爲に扇面の上に半面十三本宛合計二十六本の空線がひかれてゐる。そして婦人の毛髮、男子の冠などの様な黒色の部分に經文が行きあたれば、それを明瞭にする爲に墨書の上から金泥で再度書き起すだけの注意がはらはれてゐる。この濃やかな心遣ひ、それは亦書寫の人が女性である事を思はせるたよりともなるであらう。

しかし、十卷それ〴〵手をたがへたこの經文の事や、又美學や美術史に題材を提供するまことに優美であり視覺的な表現の扇面の繪畫の事については深く



（經寫面扇寶國
線空と畫下の）

說く必要はない。たゞ扇面として、扇の地紙として、特に當代の著しい特徴を擧げるならば、次の三點である。卽ち、

一、現存の料紙がすべて鳥ノ子に雲母粉を糊で全面に塗つてあることゝ、

二、金銀の切箔、砂子、毛野箔で全面が裝はれてゐる事、そして

三、流水、又は墨流しの如き纏々と連續する文樣が多い事、

等である。更に木版が用ひられてゐる事も特徴といへばいへるであらう。

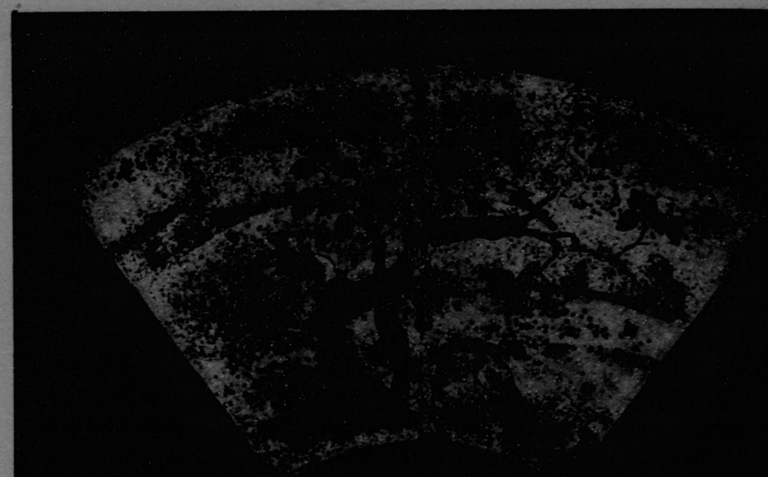
第一の雲母引の事は、この扇面以外、後に長く扇の地紙の特色として採用せられた所であつて、今日も多少用ひられてゐる糊地の扇面は、卽ちこの流の末葉なのである。この扇面に見られる木版刷が綺麗に出來上つてゐないのもこの雲母引のためである。しかし木版が行はれてゐるといふ事は、いふまでもなく數多く同一の圖樣が必要であつたためであり、それは多くの人々に賣りさばかれた事を告げてゐる。卽ち、この頃には、一方には藏人所が命を受けて、宮中の扇を調じた事が記されてゐる一面、最早、扇を生業とする工人が存してゐた事を知る事が出來る。そして、一般の大衆もこの扇面寫經料紙に見る樣な華美な扇を持たうとする迄に、世の中が華やかであつた事が窺はれる。その世の中は、時代のはげしい變改を身近かに感じて、時の流轉をしげ〳〵とみまもる世の中でもあつた。流水、墨流し、それらはこの扇面料紙の基本的な文樣であるが、この流れる姿こそ、夏の感觸といふ一面とともに時の流を表はした姿としてうけ入れられるでもあらう。面白い事に、この扇面に於ては、霞引きとして利用せられてゐる墨流しは、實は技術的に造られたものではなくて毛筆で描かれた墨流しである。その絶えんとして絶えず、或は廣く、或は狹く流れゆく有樣は、丁度連綿遊糸と形容される上代和樣の文字そのまゝである。それは又好んで用ひられた截金の、長さは僅かに五分に滿たぬ細條ながらも、或はふるへ、或はなほく、絶えつゝ續きつゝ、散りまかれた有樣に通じるものをもつてゐる。

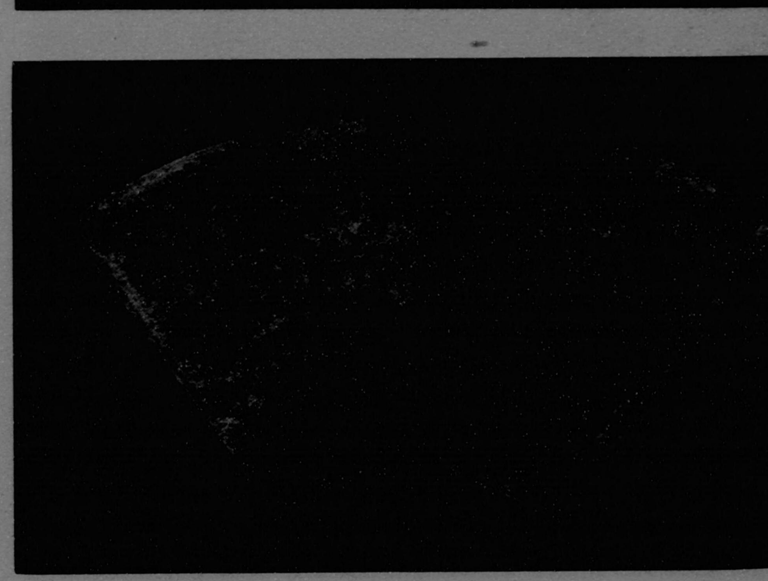
これらのさま〴〵な装飾は一團として王朝の心、いはゞ綿々たる女心（オンナゴコロ）を表現するものに外ならない。

金銀のよそほひ婉やかなこの寫經料紙の扇面を、細そやかな數骨の黒塗りの骨に張つた一尺三寸にも及ぶ扇を思ひ見る時、それらは、この時代、世を風靡した扇の姿なのである。そして、この寫經料紙の扇面の大きさも、又この時代と前後した頃の經塚出土の夏扇から見出し得る大きさに、丁度よくあてはまつてゐる。だから、この寫經料紙の扇面はまさしく實際の扇の地紙であつたのである。

二

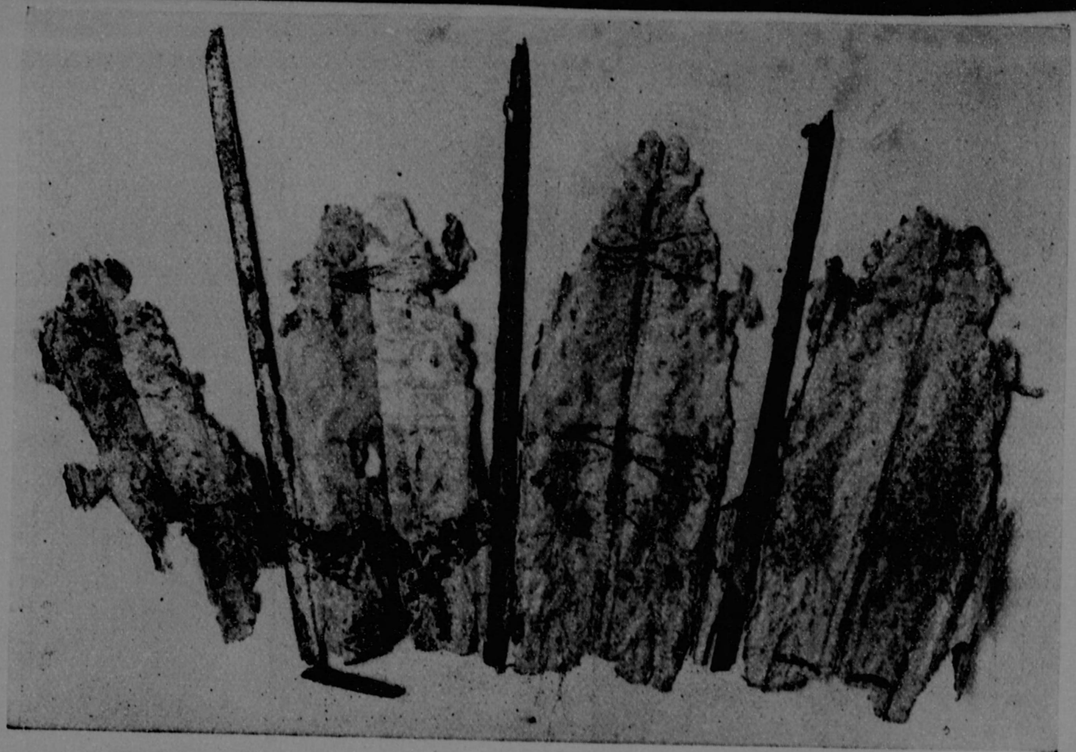
この四天王寺の扇面寫經料紙の大きさに匹適するであらうと思はれるのは紀伊國西牟婁郡上秋津村の高尾山經塚から發掘せられた夏扇の殘片である。





國寶扇面寫經（第六卷第十三枚目表裏）　藤田氏藏

國寶扇面寫經（第六卷第十三枚目表裏）　藤田氏藏



高尾山經塚發見

夏扇殘欠

高尾山には二つの經塚があつた。扇を藏してゐたのも、さうでないのも、ともに平安後期の特色をもつた和鏡であるとか、利器類とか、白磁の合子だとか、泉貨だとか其他のものを收めてゐた。とりわけ、扇を出土した方は、松鶴、秋草山吹双鳥等の文様のある鏡類が九面、刀子が二、鏃一、合子十五、それに櫛だとか鏡奩（カガミバコ）だとか黛（マユズミ）だとかが扇とともに收められてゐた。これらの種々の併埋物には、女性の色濃やかなものがある。經塚の營み主はきつと若い女性であつたにちがひない。さうした女性の手馴れの扇一枚が、奇しくも出土したのであつた。

その扇は細骨である。今は見るかげもなく朽ちはてゝ、もとの姿をたづねるべくもないけれど、僅かに、數寸殘り得た地紙と骨の一部から、この夏扇を思ひ見る事が出來る。

地紙の上に極く僅かに銀の切箔の名殘をとゞめてゐることは、華やかな金銀砂子の地紙の朽ちたおもかげであらう。その上に繪が描かれてゐる。たづねる

べくもない果敢ない繪ながらも、一もとの柳の姿を想像させる。あの四天王寺の扇面寫經料紙とまでは行かないながらも、よく似た地紙であつた事だけは察するにあまりがある。地紙そのものも、やはり同じく雲母引である。雲母に混じた糊の爲に、地紙の折目が密着して殘つてゐた。この密着した處をはなして扇を開けると、ほのかに繪が見られたのである。——その扇面が張られてゐた扇骨は、黒塗りである。今は三本殘存してゐるが、恐らく五骨の夏扇であつたであらう。要(カナメ)の處も、將又、扇の上端も欠佚してゐる。それでも殘存の部分だけで、充分、元の地紙の折りたゝんだ幅や、從つて扇面の大きさ、それから扇の全體の寸法も知る事ができる。そして、その地紙の大きさは丁度四天王寺の扇面寫經料紙と略ゝ同一である事が知られる。

この扇は、共存の遺物の語る年代のものであらう。所謂藤原後期の扇の遺物に違ひない。そして恐らく、この扇は、經塚の主の日頃の手馴れの扇であつた

であらう。手馴れの品を手馴れであるが爲に、むしろ自らが來世をねがふ經塚の中に親しい心で納め得たのであらう。(マヽ)黛にしても、鏡にしても、彌勒佛にさゝげるといふよりは、かへつて、自(ヽ)の親しさの心から、そして自の片身として納めたに違ひない。

けれども、又、一方、この高尾山の經塚は、言ふ迄もなく、熊野信仰に基く熊野詣の道すがら諸處に營まれた經塚の一つであるに違ない。後鳥羽天皇の熊野行幸が、武家鎌倉の討滅を祕かに議し給ふ御爲の行幸であつた事は歷史に名高い事であるが、さういふ爲でなくとも、王朝の後期には春日詣とならんで熊野詣は公達・女房達に最も重んぜられた參籠の一つであつた。それといふのも、釋迦牟尼佛が說く末法の時代が、丁度この頃王朝の後期に來てゐる事をかたく信じてゐたこの時代の人々には、自分等の罪障多き此身の來世をねがふ心が切であつた。熊野の神が熊野權現として、本宮はその御本地が阿彌陀如來であり

新宮は藥師如來であると強く信じて、この權現こそ我身を救ふ佛であると、熊野參詣の跡をたゝなかつたのである。從つて、遠き後の世、五十六億七千萬年の後世に出世し給ふと說かれる彌勒菩薩への手向として、親の爲、身の爲、あるはなき人の爲に、いとなまれる經塚には、こゝ熊野の地こそこよなき土地柄なのであつた。有名無名の人々のはかなくも營みのこした經塚の、熊野路に點々と今に見出されるのはまことに故なしとはしない。

しかし、經塚をいとなむ心が、さうした彌勒菩薩の手向に存するならば、經塚はひとり熊野の地のみにかぎる事ではない。かへつて、ながく其の佛の世まで保つて置けばよいので、勢ひ都の近くとか、又王朝の文化のひろがるまゝに遠く西は九州より東は陸奥迄も、或は繁く或は疎らにこの塚がいとなまれてゐる。さうした經塚の中に、ごく珍しく扇がともに埋められる事が知られてゐる。高尾山の經塚もその一つである。駿河國富士山の近く愛鷹山の經塚にも、美濃國土岐郡の櫻堂のも、亦同郡日吉村のも、共に檜扇を收めてゐた。

しかし、これらの經塚の檜扇の中にあつて、伊豫國越智郡の奈良原神社の境內より見出された遺物こそ、その白眉といふ事が出來る。聖經を入れた經筒を納めた二・三尺に達する曼荼羅の毛彫のある銅の寶塔、それらはまづこの經塚の壯嚴華麗さを物語る。納入の諸品を見ても鑄上りの鮮やかな松菊双雀鏡や、草花双鳥鏡等の平安末期の和鏡が五面、白磁合子二口、刀子・銅鈴・鐵鈴・宋錢・金銅箸・瑠璃の丸玉・銅の鰐口其他とともに檜扇二枚の出土は、實に素晴らしく堂々とした經塚である事を示してゐる。

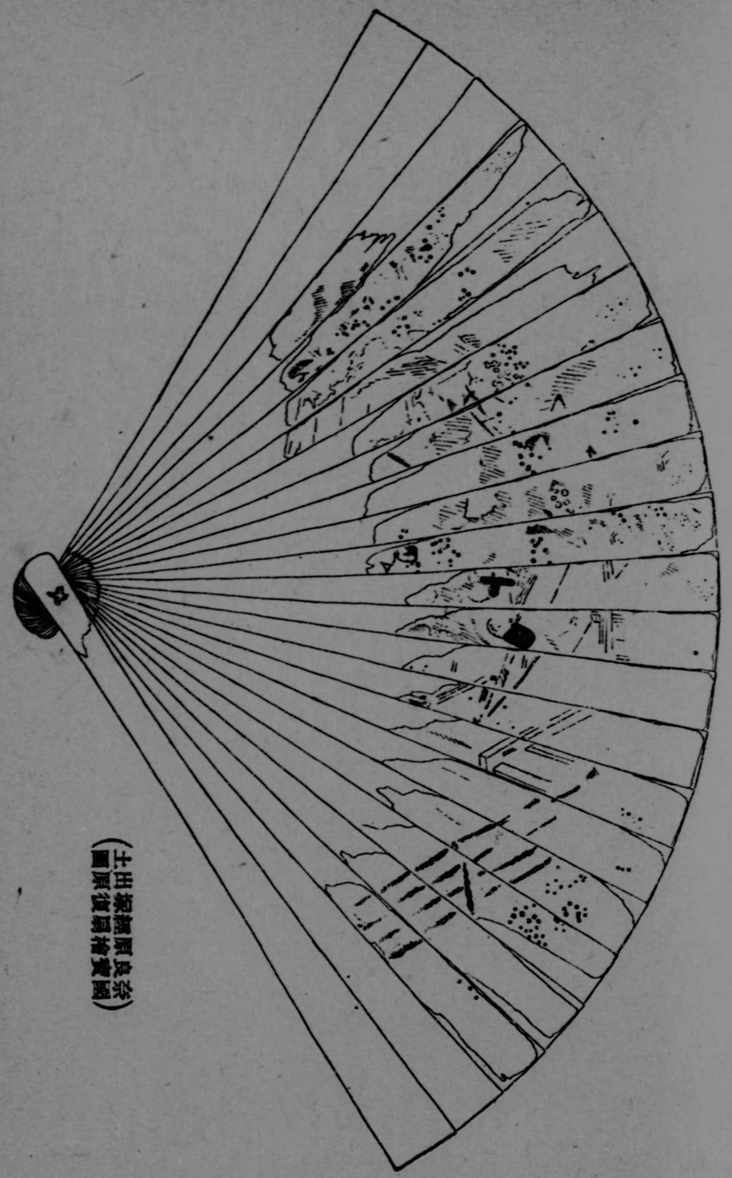
とりわけ銅の寶塔とならんで二枚の檜扇は數少いこの頃の扇の遺物に貴重な類例を加へるといふ事が出來る。

その一枚は杉の柾目である。雨露の爲に朽敗して上下の二部にわかれてゐるけれど、その板數は二十三枚、正しく三重の檜扇であつたに違ひない。一面に

雲母を塗つた上には金銀の切箔の痕跡を今も指摘する事が出來る。そして、二人の公達と一人の童の引目鉤鼻の容貌さへも判然と識別できる。中門のほとりに花を眺めやると見えるこの繪のおぼろげなあとかたは、裏も同樣な花樹のたゝずまひをおもはす繪樣とともに持人の日頃愛惜おかなかつた事をつげる樣である。僅かに殘つた銅錆のはげしい飛鳥形の要は、もと金色はなやかな金銅毛彫の蝶鳥の樣である事を示してゐる。他の遺存の例と同じく、この檜扇も一側で緘ぢられた檜扇である。たゞ横目でなかつた爲に、幸ひにも檜扇の上部を殘し得て、緘孔は欠失はしてゐるけれども、その緘方の一部を想察させる。この頃の檜扇それはかういつた繪、この樣な形の檜扇であつたのである。

しかし、こんな檜扇のみでもなかつた。奈良原神社經塚の他の一枚の檜扇は卽ち兩の親骨に銅の薄板を用ひたものであつた。

銅色のかげもとゞめない、この錆び盡した銅の檜扇は、それでも、殆んど損



（土田塚經原良奈
圖原復扇檜寶國）

傷する處なく二十二枚の板數と五瓣の花形の要(カナメ)を完備してゐる。中の槍板は、雲母引である。槍様は見るよしもない。銅の親骨に穿がたれた絨孔は一つには丁度江州坂本村出土の銅の槍扇殘欠と同様に左右に、他の一つには一側のみに存してゐる。長さの一尺といふのも略々坂本のものと同様である。當時の槍扇はこれらの長さである。

この槍扇は、正しく鏡表骨槍扇である。王朝末期の日記にみられる鏡表骨槍扇の實體は、經塚が傳へて來たのだ。鏡表骨、鏡鞍、恐らくはもと銅に水銀の

（坂本村出土）

鍍金をほどこしたものであらう。その表(オモテ)が鏡さながらの光りと澤(ツヤ)に照り映えねば鏡とはいひ得ない。

奈良原經塚の藏したこの鏡表骨槍扇は正しく女性の槍扇である。この杉目扇は童の持料である。當時さかえた名門の一家がその夫とその妻とそして若き子達の持料を收めて自分らの後世をねがつた當時の姿を、今、人々は眼前に思ひうかべる事が出來るであらう。さだめしその時は、いとも華やかな供養の儀式がこの一家の手によつて壯嚴の限りをつくされ、會する人々も又自らも後世安穩を信じて涙をながした事であらう。

これに比するならば、愛鷹山のも、櫻堂のも、亦日吉村のも、皆すべて寥々たる斷片に過ぎない。

これらの槍扇はどれもこれも腐朽しつくしてゐる。どれもこれも二三寸、又は五六寸の殘片である。板數にしても五六枚ばかりも殘つてゐる方はまだ多い

方である。殆んどすべては檜扇の形體をすらとゝめてゐない。しかし、これらの總てはみな杉横目の扇であつた。杉の板目があざやかに殘り、その上に金銀砂子の痕跡や、櫻花などの胡粉のあとを見る事が出來る。恐らく當時は目もあざやかな檜扇であつたに違ひない。それは、これらの扇を出土する經塚のすべてが不思議と豐かな埋納品を藏して美はしい願主を思ひ起させる事のやうに。——水鳥、双鶴、花草などの纖麗な平安和鏡、白磁の合子、櫛箅、そして時には宋錢までも、それがともに埋納せられた品々であつた。

三

藤原時代の中末期、世に行はれた經塚の、數多い遺物の中に奇しくものこされた若干の扇どもに伍して、その美はしい當時の姿そのまゝで今につたへられた遺品も亦一二之をたづね得られる。

童のもつものは——經塚に見られる杉目檜扇それに違ひない。しかもその全い形でつたへられたのが京都帝大所藏のそれである。

この扇はもと壬生官務家につたへられた。官務家は奉親以後累世右大史となり宮中の事を行ふ家である。さういふ家の奥ふかくこの扇は八百年以上も傳世した事が尊いのである。そして、なほ、王朝の横目扇が、殆んど失せて、僅かに經塚遺物の中にその片鱗をうかゞひ得るにすぎぬ今日、薄板の上方を少しばかり欠失しながらも、——中にはその大部分を失つたものも數枚存するけれども——毛彫のある金銅の蝶鳥形の要が、二十五枚の薄板を、左右から昔ながらに結び合せて、王朝の横目扇そのまゝを傳へてゐる事がこの上なく尊いのである。

とぢあはされた二十五枚の薄板の面には、細い小さい柳葉狀の凹みの列が縦にならんでゐる。鏤鉋（ヤリカンナ）のあとである。厚さ二厘位になるまで鏤鉋でけづるこの技

揃は、直柾（マンマサ）の木材から取らねばならぬ繁き板目（イタメ）の場合に於て特に困難な仕事である。この事だけでも王朝の後期の、木工の技術の素晴らしい發達を思はねばならない。雲の如き大勢の年若い公達は、必ずこの横目扇を翫んだのであるから、おどろく程多くの横目扇が調進せられたに違ひない。この遺品が示す様に、薩摩杉がその材に多く用ひられたのであらう。綾杉扇といふ名でこの杉横目扇が呼ばれた事のあるのはその爲である。遠く都をはなれた薩摩の土地から、遙々と杉材が京へ送られた事は、けつして奇とするには足りない。當時彼の唐木や沈や紫檀の如きが八重の潮路をしのいで異國から渡來してゐる事を追想する丈で充分である。しかし、又、横目扇が決して杉材からばかりでなく、檜材からも造られた事があるのであつて、さうした場合には、その材は內地の、しかも可成り寒國の或は飛驒木曾などの高山の地に生ひ繁つたであらう巨木に違ひない。さういふ巨木奇材が地方から、どし〳〵と都に送られてゐる。都の

貴人の庭宅や、その歸命する寺院の造營は朝にかしこ、夕にかしこと工が起こされ、宮中の國事をさへなげうつて一寺の完成に邁進した人達もあつた程であるので、平安中期・後期に都をさして上つて來た木材は大した數であつたであらう。大規模な輸送が、人の力でなされた事であらう。横目扇の杉材も、かういふ木材の一であつたのである。

この杉横目扇は、表には、二重にとりよろふ群ら山に、數行の飛鳥の列が高く飛去り或はひくゝ山の松枝に舞降りる様をうつし出してゐる。線描の蝶と鳥、それは裏繪である。これらの圖様、筆致はいふまでもなく王朝の優美さを源はせてゐる。

この表裏の繪畫は、杉の年輪が極めて繁く横に流れる素地の上に、僅かに霞引を配したのみで、極彩色で畫かれてゐる。——杉の横目が丁度墨流しそのまゝの效果を表してゐる。木の横目、紙の墨流し、この二つは共に同じ時代の感

覺のうみだすものでなければならぬ。そしてそれはやがて、烟霞にけむる野山を

野煙ノ春ノ光ニウソフイテ、各一句ヲ吟シ、山霞ノ晩ノ色ヲ酌ム、忽ニ數盃ニ醉ヘリ

と詠んだ心である。

まだ加冠もなき若年の公達が、かうした横目扇を日常の手馴草とする事は自ら

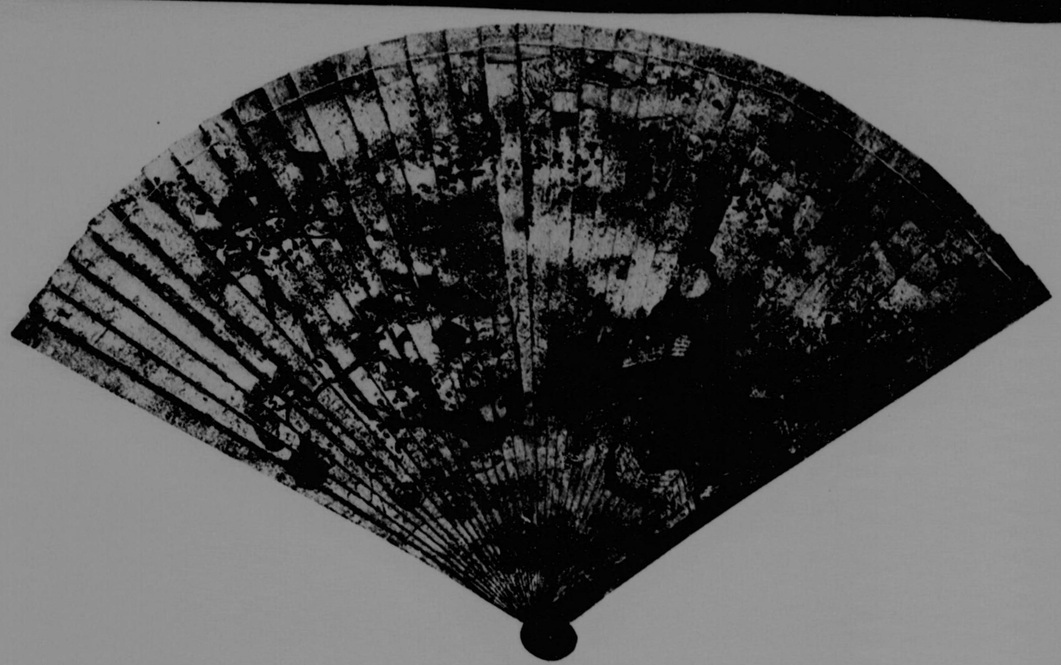
に、王朝の意識を心に深かく浸みこませる事となつたであらう。

四

王朝の横目扇にくらぶれば、柾目の檜扇は技術の上からは、それほど困難なものではない。しかし、この柾目の檜扇でも、王朝から今日迄傳來したものとては僅かに數枚をかぞへ得るに過ぎない。そしてそれが、すべて公卿達の檜扇ではなくて、女房の又は幼ない人達の檜扇である事は、經塚遺物の檜扇と同樣

杉横目扇　　官務家舊藏

國寶　傳平氏奉納莖手繪女房檜扇　　嚴島神社藏



國寶　傳平氏春納華手繪女房檜扇　　嚴島神社藏

であり興味深い事である。

その檜扇どもは有名な嚴島神社に藏される品々である。

四天王寺といへば、聖徳太子を思ひ奉るほどに、嚴島といへば、人はたゞちに平家を思ひうかべる。こんなに平氏一門の深い信仰の存した神社であつた。嚴島神社のものといへば、平家奉納の品々ではなからうかと聯想される。まことにこの檜扇も平家奉納のものであつた。

一つは、神社では葦手繪檜扇と呼ばれてゐる檜扇である。この檜扇は、この薄板の上部の一側に絨孔と僅かに殘つた絨糸までも認め得る程に、殆んど完全に近い形で傳へられてきた。今は、親板(最端の板)に次ぐ一枚が破失してゐるが、もとは三十五枚、長さ一尺の檜扇であつた。所々の下地の剝落したあとからは、檜の柾目が規則正しく細やかに並んでゐるのを知る事が出來る。しかし、表裏すべて胡粉の下地塗の上に、恰も當時の扇地紙をそのまゝに、雲母粉

を塗つてゐる。そして、四天王寺の扇面寫經と全く同様な金銀の切箔・砂子・野毛箔等で全面を化粧して、その上にみどり子を中に、あでやかな公達と女房の相語らふ風情、それに一本の松樹を配して表繪を形造つてゐる。裏は、散りゆく紅梅に、二つの火取籠からゆら〳〵と立ちのぼる煙が枝にまつはる姿をうつしてゐる。それに片輪車。

この表裏の繪はともに各々一首の歌をあらはしてゐるといふ。嚴島社の神主棚守元貞はこれを解して、

表は

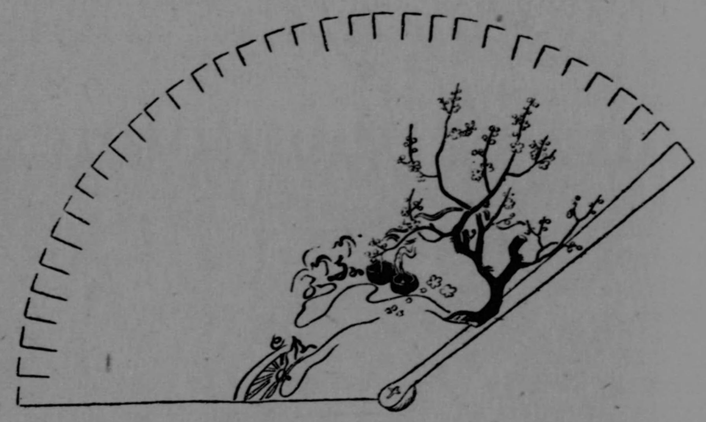
ちる梅の色も匂ひもそひつるに
などかとはるゝ人はなからん

裏は

子の日する中にそだちてみどりなる
さが野のこまつかすみたなびく

といふ二首であるといふ。卽ち、

表ノ（元貞は裏繪を表、表繪を裏と解してゐる）、アシデノウタ、ちる梅のトハ、第一圖（これは刊本嚴島圖繪の第一圖、以下倣之）ニ梅花ノ落タルヲカケリ。色もにほひもトハ、花ノ紅ナルヲ色ニトリ、薫爐ニ煙ノタツカタヲ以テ、おもひニアテタリ思ひのひヲ火ニトリナスハ古例ナリ。そひつるにハ、第二圖ニ今ヒトツ薫爐ノアル、コレ第一圖ノ薫爐ニソヒタルユエ、そひノモヂニアテ、つるにハ卽チ鶴二羽タテリ、コレナリ。などかとはるゝハ、などかとノ四言ハ、字ヲ以テ畫セリ。第二圖ニおトヤウニミユル卽チなナリ。第三圖車ノウヘニカケルがとノ字ナリ、はるゝハ車ヲ以



テ譬ヘタリ。以下車ヲ以テタトフ 車ノ輪半破レタルヲカケリ、コレわるゝナリ、訪るゝノはと破るノわトハ假名タガヘレド、當時スデニウルハシキ文字ヅカヒニスラ假名タガヒヲリ〳〵ミエタリ。マシテコレハ畫ノ譬喩ナレバサバカリノコトハトガムベキニアラズ。人はなからんハ前件ノ破車一輪ヲ以テひとはニカレリ、コレハタはトわノ假名タガヘルコト、前件ニイヘルガゴトシ。なからんハ輪ノ半ナルヲなからんニトレルナリ。マタ裏ノアシデノウタハ、子の日するトハ第一圖ニ女ノ寢タルト男ノ起タルヲカケリ、起ト伸トハ意大ヤウ同ジケレバ、伸タルニシテ、寢伸スルヲ、子の日するニカレルナリ。中にそだちてハ第二圖ニ稚兒ノ男女ノ間ニ居ルヲ以テタトヘタリ。みとりなるハ稚兒ヲみとり子ト訓メバ、再ビカリテみとりニタトヘ、なるノ二字ヲソヘタリ。さが野の小松ハ、第三圖をこのト言字ヲ松ノ枝ニツクリナセリ、野のハ第二圖ニ比丶ト字ニテカケリ。こまハ第三圖ニこまトカケリ。つハ鶴ヲ以テアテタリ、ツルノ約ツナルユヱナリ、かすみたなびくハ第一圖第二圖ニワタリテ、上ノカタニ霞ヲカケリ、サテソノ霞さノ字ヲこノ如ク第一圖ニツクリ、なノ字ヲ第二圖ニカキ長クヒキテなびくニアテタリ。

と、刊本「嚴島寶物圖會」にその解說をのべてゐる。元貞はこの二首の歌を、それ〴〵「後撰集」・「西行集」にあるといふのであるが、不幸にも、今に傳はるどの撰集にも、何人の家集にも見出す事は出來ない。從つて、或はこの二首は、この檜扇を奉納した人の、自らの歌を葦手繪に托したものであるのであらう。その方が却つて、扇の寄進者自身を、强く表明する事が出來るであらう。

それにしても、この檜扇の筆者と寄進者は誰であらうか。所傳もなく知るよしもないけれど、これが正しく女房檜扇であるといふ事と、平家一門には名だたる姫君の繪の上手があつたといふ事から、寄進者は或姫君、そしてその姫君自らが描いたものと思ふ事も出來る。そして、その人は、淸盛の六女か、八女か、又は第九女であつたかも知れない。

この檜扇の薄板のもつ、その上端から次第にほそまつて、丁度取り持たれる手の內に至つてぐつとせばまり、それよりおもむろにひろがりゆく兩側の曲線

は何とも言ひ様のない美しくやさしい貌を示してゐる。こんなにも可憐な女房
檜扇こそ、定家が日記に「近代檜扇、細面といふ」とのべたあの細面檜扇そのも
のでないであらうか。

この女房檜扇とともに、同じこの御社には、安徳天皇の御檜扇と傳へられる
小檜扇が三枚、他の半臂（ハンピ）・石帶・飾太刀・胡簶（ロク）・矢・笏等と共に、天皇の御玩具の
御調度として祕藏せられてゐる。

これらの檜扇は、總てみな五寸二三分、薄板の數は三十二・三十四・三十五
枚、欠失の跡がみられるのでみな板數は三十五枚であつたであらう。この板の
兩面は、やはり同じく胡粉雲母の下地塗がある。要も亦金銅の蝶鳥。檜扇を飾
る繪畫は至極小形の風景である。——或は春の野山に行樂する宮人の姿である
とか、或は松の生ふる濱傍を行く旅人の群像だとか、又松山の連なるあたりを、
鶴などの群れ行く樣であるとか、——これらが極彩色の色どりもあざやかに描

かれてゐる。

この樣な檜扇は、實際の用に供せられたものではない。所傳の如く、定めし、畏
れ多くも御いとけなくして西海の波に崩じ給うた安德天皇の御玩具であらう。
しかし、こんなに小さい檜扇でも、天下唯一の極小形の檜扇であるといふ事
は出來ない。「玉葉」承久二年十一月五日の條は、

此日、皇太子（懷成三歲）御着袴也（中略）、御扇檜白（中略）銀蟹目蝶小寸法頗小。懸緒、御帶、御
泥絵
扇、各別以二檀紙二枚一裹レ之、

とつげてゐる。卽ち、承久の頃、鎌倉時代の初期には、年幼き人の着袴の扇と
して小形檜扇の用ひられた事が記されてゐる。安德天皇のこの御遺愛の御檜扇
も治承四年春の頃の天皇の御着袴の折の御扇でなかつたであらうか。彼の加冠
に至らぬ年少の人の横目扇に對し、尙一層幼少の人達の式正なものとして、檜
扇はこんなに小形になる迄に隨時に變化を與へられて來てゐる。

源平の頃より恐らく始まつたであらうと思はれるこの様な小形檜扇と横目扇、それは、多分幼年と若年とを境にして、もつ年齢を別つべきであらうか。

この様に幾つかの冬扇を藏する嚴島神社は亦夏扇に於ても貴重な遺品を傳來してゐる。

その夏扇は、つとに當社の他の扇どもと共に國寶に指定せられてゐる。それは、紙、骨ともに備はつて略々當代の姿を傳へた恐らく我國現存最古の遺品なのであらう。今は二重の箱におさめられ、「高倉院嚴島御寄進扇　久我通親卿筆」とある墨書はこの來歷をあきらかにしてゐる。

この夏扇は五骨である。一尺三寸の黒塗骨が五本、扇面の裏に露はに張られて見るからに瀟洒であり優美である。扇面の表裏に書き散らされた久我通親卿

國寶　傳安德天皇御玩具小形檜扇　嚴島神社藏